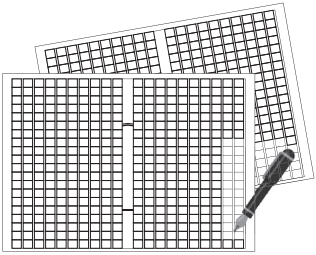
第3回ふるさと秋田文学賞
受賞作品集

第3回ふるさと秋田文学賞



目次

第3回ふるさと秋田文学賞　小説の部

●ふるさと秋田文学賞　受賞作品
『たちきる』　岩井圭吾・・・・・5
受賞者のことば

●ふるさと秋田文学賞佳作　受賞作品
『直武、りんどうの恋』　森川瑠美子・・・・・45
受賞者のことば

第3回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部

●ふるさと秋田文学賞　受賞作品

『山男と夫の贈物』　石原敏子・・・・・81

受賞者のことば

●ふるさと秋田文学賞佳作　受賞作品

『こまちの旅』　遠藤美弥子・・・・・95

受賞者のことば

●選評

タイトルからが作品　内館牧子・・・・・・116
＊脚本家　秋田市出身

人を描くこと　塩野米松・・・・・・120
＊作家　仙北市（旧角館町）出身

読みごたえのある力作ぞろい　西木正明・・・・・・124
＊作家　仙北市（旧西木村）出身

●特別寄稿

〈世界〉と〈私〉を媒介する対話としての読書　山崎義光・・・・・・128
＊秋田大学教育文化学部准教授

●秋田県の読書活動推進施策・・・・・・・・・・・・・・・・・・131

●作品募集要項・応募者内訳一覧・・・・・・・・・・・・・・・・135

第3回ふるさと秋田文学賞　小説の部
ふるさと秋田文学賞　受賞作品

たちきる

岩井圭吾・作

たちきる

写真提供 / 湯沢市雄勝郡剣道連盟

フロントガラスに次々と雪が舞い降り、視界を白く染めていく。無機質に往復するワイパーが、片端から水になった雪を払い落としている。

運転席の弟がワイパーの速度を上げた。ガラスに扇状の軌跡を残しながら、降る雪は道端へと飛び散っていく。ルームミラーで後部座席をうかがうと、父が放心したような表情で窓の外を見ていた。同じように助手席の窓をのぞいてみる。降りしきる大粒の雪が見えるだけだった。

弟がつぶやいた。

「いよいよか」

母の三回忌でも、同じようなボタ雪が降っていた。二年前の冬だ。坊主が経を読んでいる最中、ふと窓を見たら白い塊が斜めに降っていた。エアコンで暖められた室内には、線香の匂いが立ちこめていた。湯沢に戻ってきたのはそれ以来だった。

おれはボタ雪のなか、傘をさして歩くのが好きだ。軽い粉雪と違って、水気をふくんだボタ雪は傘の上に積もる。歩けば歩くほど、雪の重みが柄を通しておれの腕に伝わってくる。その重みこそが、故郷であることを実感させる。

剣道をはじめたのは物心つく前だった。当時のことはあまり覚えていない。ただ、ボタ雪の日に母が傘をさして道場まで送ってくれた記憶はある。まだひとりでは満足に防具もつけられ

ない時分だったと思う。母と並んで雪道を歩いた。おれがかつぐ防具袋に雪が降りかからないよう、傘を斜めに差しかけていたせいで、母の半身は冷たく濡れていた。靄のかかったような幼児期の記憶のなかで、その光景だけが鮮明に刻まれている。

「親父、忘れ物ねえが。手拭いとか、テーピングとか」

弟が前を向いたまま、後部座席の父に尋ねた。反応はない。

「おい、親父。聞いでるか」

「もういい、もういい」

弟は左手を振った。

「親父が答えねえのはいづものこどだ。兄貴は大丈夫か」

「出る前に確認しだ」

「基立ちが忘れ物しだら、格好つがねなあ」

はは、と弟は短く笑った。大丈夫だ。タスキと胴は会場で受け取る手はずになっている。あとは身体次第だ。体力という意味でも、一年前に基立ちを受けると決めた時からぬかりなく準備を進めてきたつもりだ。

もともと体力に自信がないわけではない。同世代の連中に比べればずっと頑丈な身体だと自

負している。しかし、立ち切り試合となれば話は別だ。三時間で三十三人の相手をする立ち切り試合では、休憩をとることは許されない。

地元で無様な姿をさらすわけにはいかない。正式に指名されてからの一年、会社にも無理を言って稽古時間を多めにとった。就職してから一番熱心に稽古をした一年だった。その甲斐あって、実業団大会でも入賞できた。しかし本当の目的はそこではない。すべては今日のためだ。

三人の男と二人分の防具を乗せた車は、湯沢市総合体育館を目指していた。

一昨日の夕食の席だった。埼玉から到着したばかりで、まだ身体が故郷の感覚を取り戻していない感じがしていた。

「あれあ、もうダメだ。ボケさはじまってんだな」

弟はグラスに口をつけた。泡の消えた発泡酒を喉に流しこんでいる。隣では弟の妻が幼子をあやしていた。一歳ちょっとの甥は義妹の膝の上でいやいやを繰り返しいる。義妹はスプーンを口元に運んでやるが、気に入らないことがあるのか、甥は一向に口を開かない。

「稽古、行ってんのか」

「心配せんでも、週三日きちっと行っでたよ。確かに剣道してる間だげはしゃきっとしてるん

だども。道も迷ったりしねえし」
「夜中に歩きまわったり？」
「徘徊はしねえよ。だども、一日中ぼげーっとしでる。母ちゃんが死んですぐの頃は普通だったけど、最近はずいぶん老けだ。この一年ぐれえは特によ」
弟はダイニングから続く廊下に視線をやった。視線の先、襖の奥には父がいる。無言で夕食を終えた父は、今頃自分の部屋で何をしているのだろう。
鍋を食べたせいか、室内は汗ばむほど暑い。ここには古い家のような隙間風は入りこまない。この家は半年前に弟夫婦が建てた。土地は父のものだから上物の代金だけで済んだという。ダイニングには真新しい空気が漂い、甥の落書きを消した跡を除けば、壁紙はまっさらに近い。
古い家は相当にガタがきていたらしい。建て替えたくなる気持ちはわかるが、母との思い出が染みこんだ家をあっさり取り壊したことには何か言っておきたかった。しかしおれは、湯沢の弟夫婦にとってはもう部外者だ。結局はやるせない感情を飲みこむしかない。
カーテンの隙間からのぞく闇夜を、白雪が舞っていた。弟が溜め息をつく。
「降っでるな。明日も雪投げせねば」
「おれも手伝う」

「馬鹿いえ。雪投げしでる場合か？基立ちは自分の身体さ大事にしろ」
その通りだ。万が一腰でも痛めれば、父や弟にも迷惑がかかる。
「わりぃな」
甥はようやくスプーンを受け入れはじめた。膝の上で食べさせながら、義妹が言った。
「私、立ち切り見たこどね。初めて見させでもらうわ」
「こうぇーぞお。三時間ずーっと相手せねばならん」
弟が言うと、呆れたように義妹が答えた。
「剣道やめた人が言うな」
弟はずいぶん前に剣道をやめた。大学に入った年だから、もう十年前になる。剣道をやめた弟は秋田市内の大学でフットサルをはじめたらしいが、長続きはしなかった。市役所に勤めはじめてからはろくに運動をしていないらしい。贅肉でふくらんだ腹がせり出している。
「おれが剣道やめたのは、何を隠そう立ち切りさ出たくねがったからよ」
冗談めかした口調だが、なかばは本気なのかもしれない。義妹が真面目な顔で尋ねた。
「出たくねなら、断れば」
「頼まれたら断れね。湯沢に生まれた剣道家の通過儀礼だ。特にうちは、親父が基立ちやった

んだがら。断ったら親父の顔さ泥塗る。兄ちゃんだって、断りたぐても断れねがったんだ」

確かに、まさか基立ちをやることになるとは思わなかった、と言えば嘘だ。立ち切りのことは、今までずっと意識してきた。毎年一月におこなわれる立ち切り試合は、八歳から十八歳まで欠かさず観戦した。見ているだけで体力を削られ、胸が圧迫されるような激しい試合だ。

交代で押し寄せてくる挑戦者は三十三人。基立ちは一人。足がふらついても、竹刀を構えられなくなっても、挑戦者は容赦なく打ち、突き、押し倒してくる。悲鳴のような声援を一身に浴びながら、基立ちは三時間の試合を完遂する。

弟は発泡酒の缶を押しのけ、ノンアルコールビールの缶を選んでおれのグラスに注いだ。金色の液体がグラスの半分にも満たないうちに、飲み口から雫が垂れた。新しい缶を取りに立とうとした弟の背中に声をかける。

「これでやめとぐ」

「えっ。ノンアルコールなのに」

「もういい。そろそろ風呂入って寝ねば」

酒はひと月前から断っていた。職場の誘いを断るのはつらかったが、当日力を出しきれないのはもっとつらい。立ち切りの機会は一生に一度しかない。悔いは残したくなかった。

「あっこのドアから出て、左手がお風呂だがら。脱衣所の引き出しさ、バスタオル入ってっがら。使って。お湯も張っておいたがら」
義妹が教えてくれた。甥の食事はまだ続いている。
ビールと名付けられた麦のジュースを飲み、席を立った。部屋を出ようとするおれに、すかさず弟が赤らんだ顔を向けた。
「そろそろ女、できだ？」
「できね」
弟は無念そうな表情だったが、口元はわずかに緩んでいた。
「兄ちゃん、あいかわらず堅えがらなあ」
「忙しんだ、いろいろ」
「すっがり東京人なっちまっだ」
「埼玉だって。何遍言わす」
キャリーバッグから下着と寝巻きを引っぱり出し、脱衣所で服を脱いだ。浴室暖房のおかげで風呂場はよく暖まっている。熱いシャワーを浴びると、最初に鳥肌が立ち、徐々に委縮していた皮膚がほぐれていく。清潔な浴槽に身体を浸した。風呂は心地よかったが、実家に帰って

きたという感じはしなかった。

古い家には浴室暖房がなかったから、冬場の風呂場はいつも拷問のように寒かった。毎日浴槽を洗って湯を張り、蒸気で室内を暖めておくのはおれの役目だった。おれが実家を離れてからは、誰がやっていたのか知らない。母だろうか。

湯船に顔の下半分を埋めながら、さっきの会話を思い出した。

女か。

付き合いのある女がいないわけではないが、恋人と呼べる仲じゃない。最後に付き合った女は、学生時代の剣道部の後輩だった。彼女とは母が死んでからすぐに別れた。理由は判然としない。その時期の記憶はあまり確かではないのだ。

弟は湯沢に残り、堅実に暮らしている。地元の友人たちも似たようなものだ。一時期東京や大阪に出ていたやつらも、三十を前にして地元に戻ってきた。おれは三十になってもまだ剣道をしている。というより、剣道しかしていない。妻も子供も、持ち家もない。あるのはちっぽけなトロフィーと賞状だけだ。

立ち切りをやり遂げれば、何かが変わる気がした。いや、違う。何かを変えるために、おれは立ち切りに挑むのだ。

父が基立ちを務めたのは二十数年前のことだ。それは、おれが初めて観戦した立ち切り試合だった。

基立ちは百錬自得胴と呼ばれる胴をつける。中央に日の丸の入った扇が金で描かれ、扇を囲むように「百錬自得」の金文字が配置されている。川連漆器の職人が手がけたという、美しい紅の胴だ。百錬自得胴を身につけた試合前の父は、緊張に顔をこわばらせていた。

父は東北では名の知れた剣士だった。国体に出たこともある。全日本には出られなかったが、秋田県選手権では上位が定位置だった。先鋒の若手を寄せ付けず、続く次鋒からも軽々と面や小手を奪った。滑り出しは順調だった。

試合開始から一時間が過ぎたあたりから、父の動きは目に見えて衰えた。踏みこみの音が弱々しく、すり足が鈍くなる。それでも剣先はぶれず、背筋がぴんと伸びているのは見事だった。

弱った父に、代わる代わる挑戦者が襲いかかる。面打ちの連打。強烈な突き。体当たり。父は何度も転ばされ、そのたびに起き上がった。次第に転んでから起きるまでの時間が長くなってくる。声が聞こえなくなる。

途中から母は泣いていた。弟もわんわん泣いていた。しかしおれだけは絶対に泣くもんか、

と歯を食いしばって涙をこらえていた。涙の奥で父がまた転ばされた。頑張れ、頑張れ、と叫び続けたせいで、喉がかすれていた。

すでに父は四十に手がかかろうかという年齢で、選手としての盛りは過ぎていた。なぜその年齢で基立ちを引き受けたのか、その理由が今ならわかる。涙を浮かべながら声援を送っていた、おれと弟のためだ。

地を這い、まともに打つことができなくなっても、父は最後まで背筋を伸ばしていた。糸の切れた操り人形のように不格好な動きで、それでも竹刀は手放さなかった。三十三人の挑戦者を耐えきった父は、崩れそうな身体を押しとどめ、蹲踞（そんきょ）の姿勢をとって竹刀を収めた。その時のしっかりと伸びた背中は忘れられない。

友人や先輩後輩、知人たちが父を取り囲んで立ち切りの達成を祝った。汗みどろの面を外した父は、蒼白の顔に微笑を浮かべていた。おれと弟を手招きすると、父は両手のひらをおれたちの頭にそれぞれ乗せた。

「見だか」

うん、とうなずいた。弟もそうした気がする。

その日からずっと、立ち切りを意識しながら剣道を続けてきた。立ち切りに出場して恥ずか

しくない剣道を身につけたかった。血尿が出るほど辛い稽古でも、立ち切りに比べればましだと思えた。

五年前に母が亡くなったとき真っ先に、死ぬ前に立ち切りを見せられなかったことを後悔した。その望みはもう叶わない。志願してでも出場すればよかった、と何度も悔やんだ。

一方で、立ち切りに恐怖を感じていたのも事実だった。力尽き、死体のように横たわる基立ちを何人も目の当たりにしてきた。弟が剣道をやめたくなるのも無理はない。そう思うほど、立ち切りは過酷だった。

きっかけは母の三回忌だった。

雪のなか車で寺へ帰る坊主を見送り、おれたちは屋内へ引っこんだ。父は坊主への礼のほか、一度も口を利かなかった。もともと口数が多い人ではないから、特に不自然とも思わなかった。腹がせり出しはじめた義妹は歩くのも億劫そうで、弟が腰を支えていた。まだ古い家で、部屋にはところどころ隙間風が吹いていた。

義妹を食卓の椅子に座らせ、弟と二人で仏間を片づけた。今ほど肥えていなかった弟は、手際よく座布団を片づけた。手が空いた頃合いを見計らって声をかける。

「わり、そろそろ駅まで送ってくれねが」

その日のうちに埼玉へ戻るつもりだった。掛け時計を見上げる。今から車で駅まで行けば、湯沢を三時過ぎに発てる。八時までには大宮に着くだろう。翌日は朝から社外で打ち合わせの予定だった。

「支度は？」

「終わってる」

弟は居間で車のキーを取って玄関に向かった。上がりかまちに腰をおろしかけた弟が、ふいに振り向いた。

「兄ちゃん。まだ時間あっか。一瞬」

奥羽本線の電車が湯沢を出るまで余裕があった。

「いいけど」

「ちょっと」

弟は玄関横の襖を細く開けた。そこは父の部屋だ。意図がわからない。

「おい」

手招きされるまま、細い隙間から室内をのぞいた。

部屋の真ん中で、白髪の男があぐらをかいて背中を向けていた。父の部屋は六畳の和室で、

がらんとした部屋には本棚と書き物用の机が一つあるだけだった。布団も剣道具も、普段は押入れにしまわれている。父は庭に面したガラス戸と相対し、灰色の空から降りしきるボタ雪をじっと見ていた。いささか曲がったセーターの背中は、立ち切りをやり抜いた男のものとは思えなかった。

弟は静かに襖を閉めた。何となく互いに無言のまま、車に乗った。カーエアコンを入れると、温い風と一緒にカビの匂いが吐き出された。ハンドルを握った弟が、車を道に出しながら言った。

「最近、どうも塩梅わりんだ」

具合が悪いのは、身体ではなく心のようだった。スタッドレスタイヤが湿っぽい雪道を走りだす。道路の両側に除雪した雪が高く積もっていた。

「魂抜けだみてえにして、一時間も二時間も部屋がら出でこね」

父は数か月前、長らく務めた酒造会社を定年退職したばかりだった。仕事は酒造りには無関係で、もっぱら商店や居酒屋への営業を担当していたらしい。詳しいことは知らないが、それなりの職位にもあったはずだ。

「やっぱ、仕事辞めたがら？」

「それもあるけど、母ちゃんのこともあんでね」
「今日だけでねの。三回忌だから思い出して」
「だから、こごんとこずっとだって。会社辞めでも母ちゃんがいれば……」
そこから先、弟は言わなかった。言えば悲しくなるだけだ。
定年を迎えて無気力になる男の話は、新聞や雑誌でも読んだことがある。しかし父がその当事者になるとは思わなかった。何しろ、父には剣道という生きがいがある。むしろ仕事の時間を剣道に使えるようになって、喜んでいると思っていたくらいだ。自分の気楽さに嫌気がさし、その反動でつい詰問のような口調になった。
「稽古はしてんのが」
「道場にはちゃんと行ってるよ。でも家に戻ったらあれだ」
「教士七段だべ。湯沢剣連とか秋田剣連から、役職せえって言われでるはずだ」
「断ってんだど」
「なして」
「知るか」
豪雪の昼下がり、車の影はまばらだ。滑るように走る車のなかに弟は怒声を響かせた。

「おれは親父のこど何でも知ってるわけでね。だども、東京いて何もしてね兄ちゃんからなんやかや問い詰められるいわれもね。ただ、ちょっと相談しだかっただけだ」

弟の口は無理に閉めたチャックのように歪んでいた。

無神経な言い方だった。弟は日々、妊娠している妻をいたわりながら、市役所の仕事をこなし、老父の世話を焼いている。仕事と剣道に打ちこむおれの生活は、弟がそれらを背負うことで成り立っている。

弟は高校卒業と同時に剣道をやめた。ほかのスポーツもやってみたいから、というのがその理由だった。大学生だったおれは、弟のことを心の底では根性無しだと見下していた。剣道を続けることのみが善であり、竹刀を放りだすやつは全員敗者だ。本気でそう思っていた。それが傲慢とも知らず。

「すまん」

雪に覆われた田畑の間を縫うように走る。駅に近づくにつれ、間遠だった民家の距離が縮まっていく。寺やコンビニ、ガソリンスタンドが目立ってくる。車も増える。赤信号でブレーキを踏んだ弟がふたたび口を開いた。

「とにかぐ、親父のこど。今はいいけど、もし手に負えんようなったら、施設さ入れるこども

考えでる。そん時は兄ちゃんにも金ば出してもらいてえが、ええか」

湯沢を離れて暮らすおれには、それくらいしかできることはない。

「もちろん構わね。しかし、まだそごまでには見えねがったども」

「将来の話よ。知り合いに聞いだら、症状が急に進むこどもあるんだと。まあいくらボケても、こんな豪雪地帯で徘徊するようなことはしねな」

「んだな」

声を合わせて、小さく笑った。思えば、この時はまだ弟も楽観的だった。一昨日の夕食で見せた、諦めの混じったような表情ではなかった。ボケさはじまってんだな、と言った声の大きさが、今さらながら残酷に響いた。

埼玉に戻ってすぐに、湯沢雄勝剣連に電話をかけた。立ち切りで基立ちを務めさせてほしいと願い出ると、あっさり聞き入れられた。過酷な基立ちは成り手が少ないらしい。わずか数日で、二年後の基立ちとして指名されることが決まった。

総合体育館の駐車場には、冬用タイヤの車がずらりと停まっていた。秋田だけでなく、仙台や庄内のナンバープレートも目につく。なかには青森や長野、横浜のナンバーもあった。おれ

と父は各自の竹刀防具をかついで体育館へ向かった。
入口ではテレビカメラをかついだ集団が待ちかまえていた。
「兄ちゃん、テレビだぞ」
弟の声に気づいたカメラがこちらに向いた。会釈して通り過ぎようとしたら、調子に乗った弟がそばにいたレポーターらしき女性に話しかけた。
「こん人、今日の基立ちの一人」
「やめろって」
「イケメンに撮ってやってな。剣道だから顔さ映んねけども」
ははは、と弟は一人で笑っていた。愛想笑いで応じる女性に、ふたたび会釈して通り過ぎた。館内では新聞や雑誌の記者らしき人も歩いていた。後ろをついて歩く父の顔には一度も表情が浮かばない。動くマネキンのようだった。
「おい、久しぶり」
後ろから肩を叩かれた。振りかえると、高校の同級生だ。就職先が大阪だったから、卒業してからは数えるほどしか顔を見ていない。会うのは数年ぶりだった。顔にはきっちりと、その年数分の時間が刻まれている。

「おお、おめもいたんか。昨日の稽古会いたが？」
「昨日の夜大阪からついた」
「ちゃんと稽古してるが」
「任せとけ。ボコボコにしてやるがらよ」
歩いていると顔見知りが次々に声をかけてくれる。道場の仲間、高校の剣道部員、県警の強豪選手。彼らは皆、今日のために挑戦者の役目を受けてくれた。最後まで背筋を伸ばして試合を終えることが、挑戦者たちへのお礼だ。
館内は立ち切り試合独特の雰囲気に包まれていた。久々の再会に喜ぶ者。不安と誇らしさの混じりあった基立ちの家族。館内は雑多な人たちで賑わっている。マスコミや県外からの来客も多く、ちょっとした祭りと化している。
会場の正面には国旗や市旗と並んで、百錬自得の四字が堂々と掲げられている。観客席からは帯のような縦長の垂れ幕が下がっていた。おれの名前が入った垂れ幕もあった。地元の友人たちがつくってくれたのだ。
〈剣心一如〉〈燃え尽きろ！〉〈剛毅果断〉〈祈健闘〉
勇ましい言葉と一緒に名前がでかでかと書かれていると、誇らしいような、気恥ずかしいよ

うな気持ちになった。再会した一人一人に礼を返す。
道着袴に着替えて、念入りに柔軟をこなす。立ち切りで最も怖いのはケガだ。極限状態まで疲弊した身体は、ちょっとした弾みで壊れかねない。特に転倒の仕方が悪いと、関節や靭帯を痛めることになる。挑戦者たちも心得ているから、無理に転ばせるような真似はしないとは思うが。
アキレス腱を伸ばしていると、見なれた顔が近付いてきた。
「緊張しでんな」
地元の道場に通っていたころの仲間だった。今は横手で教師をしている。昔はりんごのような頬のあどけない少年だったが、今ではヤニの匂いをまとった立派な三十男だ。こいつも二年前に立ち切りを経験していた。
「おめん時は緊張しねがったか」
「そらバキバキよ。なんせ、こうぇーこうぇー。これから起こるこど想像するだけで、筋肉痛さなる」
「ビビらせんな」
おれたちが通っていた道場は、地元では有名な強豪だった。道場主は脱サラした剣道家で、

自宅の一部を改装するという入れこみようだった。幼稚園の制服を着ていた頃から、おれたちはその道場主にしごかれてきたのだ。主は八十歳の今でも稽古に立っているというのだから、恐れ入る。

ふと、弟との会話を思い出した。その道場で、父は今でも週三日稽古をしているはずだ。

「おめ、今でもあの道場通っでる?」

「たまにな。月に一回くれえだども。先生が来いってうるせがら」

「うちの親父、ちゃんと稽古しでるか」

「ああ、親父さんな。よぐ見るよ。あの道場でも別格だな。さすが七段だわ」

「様子のおかしいとご、ねか」

「おれは稽古でしか会わねけど……別に。むしろ、前より強ぐなってる気する。八段でも受けるんかど思ってだ」

旧友は怪訝そうな顔をしていた。

「なんかあったが」

「いや、なんもね」

「そうが。まあ、がんばれ」

去り際、旧友は身体をほぐす挑戦者たちの方を見た。視線の先には防具をつけて素振りをする父がいる。肩からまっすぐに伸びた指先まで神経が行き届いている。うつくしい素振りは還暦を過ぎても健在だった。竹刀が空を切る音が、離れたおれの耳まで聞こえてきそうだ。自宅での呆けたような姿と比べれば別人のようだった。

長らく、父とは稽古をしていない。道着姿を見るのも久しぶりだった。父との試合がどうなるのか、想像もつかない。

受け取った百錬自得胴の紐を結ぶ。百錬自得胴の内側には、歴代基立ちの名前が書かれている。誰かが気を利かせたのか、俺の胴には父の名前が記されていた。二十数年前に父が使った胴。川連漆器の紅は色あせず、体育館の蛍光灯を照り返している。

どこからか、剣連の職員らしき人がタスキを持ってきた。幅の広いタスキにも名前が入っている。背中の胴紐に結わえたタスキはくるぶしに届くほど長い。

開始時間が近付くにつれ、館内は徐々に話し声のトーンが低くなっていく。まわりにはほかにもタスキを結んだ剣士たちがいる。男性四名、女性二名。計六名が今年の立ち切り試合で基立ちを務める。試合を目前に控えた緊張からか、誰も口を利かない。空気を察知したのか、挑戦者や付添人たちも離れていった。

居並ぶ観客たちを見ると、弟の隣に別の車で来た義妹と甥がいた。義妹の膝の上には、今日は甥ではなく母の遺影が置かれている。額縁に囲まれて微笑する母に、心のなかで手を合わせた。

どうか最後まで見守ってください、と。

先鋒は地元の大学生だった。テレビカメラのせいで緊張しているのか、動きが固い。居着いたところをすかさず打ちすえ、面と小手を奪取する。初戦から全力を出し切るつもりだった。スタミナ配分を気にする余裕はない。

立ち切りは二本先取では終わらない。一人五分の持ち時間をフルで使いきる。その後も相面を奪うと、ようやく目が覚めたのか、相手のすり足がスムーズになってきた。

「ええぞ、ええぞー」

客席から弟の声が聞こえた。

最初の五分は三対〇で勝ち。竹刀を収めて後退する途中、客席を見た。弟と義妹が手を振っている。甥は席に腰をおろし、呆然とした顔つきでこっちを見ている。

汗を拭う暇もなく二試合目がはじまる。今度は秋田県警の若手選手だ。気負いなく、素直に

面を打ってくる。こっちがのけぞりそうなほど前のめりの剣道だ。冷静に竹刀を受け、返し胴で仕留める。また客席が沸いた。

誤解を恐れずにいえば、この二人は勝って当然の相手だ。緊張した大学生や焦りのまま突っかかって来る選手に敗れるようでは、実業団のエースは務まらない。ただ、体力の消耗という点では元気のある若手は厄介だった。

三人目。汗が額の上からとめどなく流れてくる。目に入りそうになり、思わず片目をつぶる。その隙を逃さず打ちこんできた竹刀を間一髪でかわす。強烈な体当たり。踵を浮かせたまま、指の付け根でぐっとこらえる。

五人目。手のひらにぐっしょりと濡れた革の感触を覚える。毛羽立った革が指に貼りつく。道着と袴が重い。まだ遠くに跳ぶことができる。突きを見舞ってきた相手の竹刀を払い落とし、逆に突きをくれてやる。

八人目。息が苦しくなってくる。膝に手をつくことは許されない。序盤での消耗が効いている。まだ四分の一か。それを考えた瞬間、ずしりと身体が重く感じられる。

「がんばれー」

面布団越しに義妹の叫び声が聞こえる。立ち切りを初めて見るという彼女は、今どんな顔を

しているだろう。改めて気力を奮い立たせる。剣先を下げて誘い出し、面に跳んだ相手の出頭に小手打ちを食らわせた。

十一人目。県警のキャプテンが現れた。手合わせは初めてだが、どうせやるなら体力が余っている時にやりたかった。初太刀から連続の面打ち。あっさり捉えられる。反撃に出ようとした手元を捉えられて小手あり。

心が折れそうになる。使いなれた面なのに、フルフェイスを被っているように息が苦しい。手先、足先が痺れてくる。口のなかに血の味が広がる。面金の奥の相手が飛び出した。面を防ぐのが精一杯だった。その勢いのまま体当たり。こらえようとするが持ちこたえられず、膝から崩れ落ちた。

記憶を呼びさました。この立ち切りを母が見ている。

すぐに立ち直り、中段に竹刀を構える。攻めるのはこちらからだ。間合いを縮めると、相手の手元が浮く瞬間が見えた。すかさず小手。旗が上がる。

「いいとご、いいとご！」

弟の声が鮮明に聞こえた。誰よりも大きい声だ。おれは一人じゃない。弟も義妹も甥も旧友たちもいる。母も見守っている。だから何としても最後まで、父のいる場所までたどりつかな

ければならない。
横目で待機する挑戦者を盗み見た。父は瞬きもせず、おれの試合を見ていた。三十三人目の相手は父だ。それはおれの希望だった。どんなにつらくても、最後に父が待っていれば耐えないわけにはいかない。
十四人目。一時間を過ぎ、一段と身体が重く感じられる。すぐにでも竹刀を放りだし、仰向けに寝転んでしまいたい衝動に駆られる。おれの背筋は伸びているだろうか。わからない。もはやそれどころではない。
半開きになった口が閉まらない。まぶたが下がってくる。真夏の犬のようだった。汗が足の裏まで濡らし、踏みこむたびに滑りそうになる。もう顔は汗もかかない。手足の痺れは強くなる一方だった。それでも掛け声だけは絶やさないよう、腹の底から叫び続ける。
明るかった声援は悲鳴に変わりつつあった。がんばれー、がんばれー、という声が最初よりもずっと遠くに聞こえる。誰の声か判別できない。家族か友人か、見知らぬ旅行客か。会場で遭遇したいろんな人の顔がよぎる。
十七人目。大阪から駆けつけた同級生だった。上段に構えると、いきなり面に振り下ろした。竹刀が風を切る音が聞こえて、脳髄に衝撃が走る。

かろうじて竹刀を構えるが、剣先が左右に振れる。距離の短い小手を打とうと跳んだが、あっけなく打ち落とされた。よろよろとすり抜けようとした背中を竹刀で押され、うつぶせに倒れる。

「まだ半分だぞ。気合い入れろ！」

竹刀は左手につかんだままだった。肘を伸ばし、膝から立とうとするが足腰の力が入らない。縛りつけられたように立ちあがれない。

「何やってんだ。早ぐしろ」

応じられない。副審が心配そうに近づいてきた。このまま倒れてしまいたい。ギブアップを宣告して、何もかも終わりにしたい。

しかし。もしここでギブアップしたら、これからどうやって生きていけばいいのだろう。立ち切りを放棄したことを悔いながら死ぬのは御免だった。筋肉がブチブチとちぎれている様が目に浮かぶ。汗は出きった。それでも放棄はできない。

立ち上がり、開始線に戻った。歓声がわずかに聞こえる。

中断に構えた竹刀から、今度は躊躇なく小手に跳ぶ。物打ちでしっかり捉える。小手ありが宣告される。踏みこんだ足はもうほとんど動かせない。

二十人目。意識が朦朧としてくる。夢のなかで剣道をしているようだった。

打っては倒され、打っては倒される。そのたびに起き上がり、また打つ。無理に打って出ると、剣先で喉元を抑えられる。思考の余裕はなくなり、とにかく無事に終わってくれと、それだけを祈る。

相手の目に一瞬、同情の色が浮かんだ。見逃さず面に出る。間合いは遠かったが、いつもと同じように跳べばぎりぎり届く距離だった。

竹刀が面を捉える寸前、左足のふくらはぎに激痛が走った。筋肉の内側を切り裂かれたような痛み。それでも一本を決めたのは、根性というよりも重力の成り行きによってだった。主審が面ありを宣告するのと、おれの身体がバランスを崩したのは同時だった。

横たわり、左足を抱えているおれの元に三人の審判が集まってきた。二十人目の相手も、おそるおそるのぞきこんでいる。ふくらはぎがひとりでに痙攣していた。弦をきりきりと締め上げるような感覚。

「おい、どうした」

顔をのぞきこむ主審に、かすれた声で言った。

「攣った、攣った」

主審の顔にわずかな安堵の色が見えた。取り返しのつかないケガをしたわけではないからだろう。確かに、捻挫や腱断裂でもすれば試合を続けられなくなる。攣るだけでも当事者にとっては一大事だが。

待機していた医師の指示通り、つま先をつかんでアキレス腱を伸ばす。じきに痛みが引いてくる。安堵した職員や観客が一人ずつ離れていく。

ただし、心はまだ回復していなかった。次に踏みこめば、また同じように足が痙攣するかもしれない。それにまだ十三試合も残っているのだ。数分の間休むことができたとはいえ、ささやかな休憩に過ぎない。冷えた汗が全身から体温を奪っていた。

医師が再開のゴーサインを出した。中段に竹刀を構えるが、戦意はすっかり失われていた。相手の喉元に竹刀を向けることが怖かった。

「ファイト」

客席で誰かが叫んだ。弟の声だった。

「ファイト。ファイト」

声援は一定のリズムで鳴り響く。義妹の声が重なり、舌足らずな甥の声が重なる。友人たちの声がそれをさらに大きくする。ファイト。ファイト。いつしか声の塊は膨れ上がり、会場全

体を覆っていた。ファイト。ファイト。ファイト。

声援に後押しされるように、おれは剣先を喉元につけた。再会が宣告される。初太刀から一気に入りこみ、面へ跳ぶ。綺麗に一本が決まった感触があった。左足は痙攣を起こさず、のろい足取りで相手の体側をすり抜けた。

そこから先のことはほとんど覚えていない。声に背中を押されるまま、竹刀を振り、足を踏み出した。自分が今立っているのか、転がっているのかもわからない。疲労はとっくにどこかへ消えていた。意識は飛び、普段使っていない脳の部位が身体を動かしていた。人間は意識せずにまばたきをし、呼吸をする。それと同じように、無意識下でおれの手足は面を打ち、小手を打った。

「兄ちゃん。がんばってくれえ。がんばれえ」

客席から響く弟の声は、叫びすぎて枯れていた。気のせいか涙混じりに聞こえた。

三十三人目。ほかの基立ちは皆試合を終えていた。途中で足を攣ったせいか、六人のなかでおれが最後まで残っていた。轟く声援は、すべておれに向けられていた。

父が試合場に足を踏み入れた。竹刀を抜き、蹲踞。

父はゆったりと立ち上がり、ぴたりと剣先の狙いを定めた。

がむしゃらに面を打つ。父はそれよりわずかに早く動きだし、重い面打ちを叩きこむ。脳の奥が痺れる。父は一歩も退かない。もう身体のどの部分も限界を超えていた。

「踏ん張れ」

面越しに聞く父の声だった。故郷に戻ってきてからはじめて、父の声を聞いた。

「踏ん張れよ」

間合いを取った父は、誘うように剣先を下げた。動物的な反射で面を打つ。すんでのところで父は竹刀を弾いた。伸びきったおれの身体を床へ押し倒す。無様に転がったおれは仰向けになった。面金の間から見える天井の照明がまぶしかった。

母は今頃、おれの姿を見て泣いているだろうか。母の泣き顔は想像したくなかった。

もう、見守られるだけの生き方は嫌だった。

咳は血の味だった。口のなかがやたらと粘つく。もう一度うつぶせになり、膝から立った。構えた瞬間、父が突きを放った。面垂れを正確に突いた剣先は身体をよろめかせ、今度は仰向けに倒れた。誰かが息を呑む音が聞こえた。仰向けに倒せば、後頭部を打つおそれがある。だが、父にとっては瑣末なことらしい。

わずかに残った筋力で身体をひねり、横向きに倒れた。

「立で」
館内に父の怒号が響いた。聞いた者の背筋を凍らせるほど厳しい叱声だった。総合体育館が静まりかえる。
「立だんか」
血が沸き立った。竹刀を右手に握って立つ。白い先革は紺色に汚れていた。
開始線で構えると同時に、なぜか父の打突がわかった。次は小手だ。直感という以外に、説明のしようがない。
再開と同時に手元を空けた。案の定、父は小手に来た。おれは浮きあがった小手を思い切り叩き落とし、そのまま面に跳んだ。がっちりと打突が噛み合った感触。竹刀を高々と掲げた。残心などあってないようなものだった。
さっと三本の旗が上がる。
「面あり」
四方からどよめきが起こった。歓声の膜に包まれたまま、おれは三十三試合目を終えた。
父の目は最後まで厳しかった。それが耄碌(もうろく)した老人の目ではなく、二十数年前と変わらない若き父の目だったことが、たまらなく嬉しかった。もう水分は出つくしたはずなのに、竹刀を

収めると同時に涙がこぼれ出て止まらなかった。

椅子に腰をおろしたおれの防具を、友人たちが寄ってたかって脱がせた。もう呼吸だけで精一杯だった。面が外れた瞬間、酸素が肺のなかに流れこんだ。泣きはらした目を見られたくなくて、両手で顔を覆った。感情が口からこぼれ出た。

「終わった」

おめでとう。お疲れさん。よくやったな。挑戦者たちが祝福の言葉を口にするなか、おれは父を目で探した。人の壁の後ろに隠れていた父が、友人たちに押し出されて目の前に立った。笑みはない。

「親父。おれの背筋は最後まで伸びてたが」

ああ、と言って父はうなずいた。

「しっかり伸びてだ」

客席から降りてきた弟が駆け寄ってきた。義妹と手をつないで、甥もやってきた。状況を把握できていないのか、義妹とおれの顔を交互に見ている。甥が剣道と関係のない人生を歩むとしても、今日のことが少しでも記憶の隅に残ればそれほど嬉しいことはない。

椅子から降り、床に膝と手をついた。稽古の最後にいつもそうするように、上座に向かって

深々と頭を下げた。
「ありがとうございました」
頭を上げると、義妹の手にした遺影が視界に入った。
遺影の母はもう泣いてはいなかった。

たちきる

小説の部　ふるさと秋田文学賞　受賞者のことば

「書く」という執念

岩井圭吾

湯沢市の恒例行事である立ち切り試合について知ったのは十年ほど前、まだ十代のころでした。一介の剣道少年だった私は、何度も突き倒される基立ちの姿に恐れおののき、そのたびに立ち上がる精神力に感動しました。その時の感動がこの短編小説を書く原動力となっています。

小学生にはじまり、中学、高校、大学卒業まで、私のかたわらにはいつも竹刀がありました。お世辞にも強いとは言えませんでしたが、自分なりに一生懸命剣道と向き合い、その甲斐あって四段審査に合格することもできました。社会人になってからは竹刀を握っていません

表彰式での岩井さん

が、いちファンとして今でも剣道に親しんでいます。

作中に登場する「百錬自得」という言葉は、私の好きな言葉のひとつでもあります。社会人になって小説を書きはじめた私は、当初、自らの文章のまずさに愕然としていました。ぎこちないセリフに説明口調の地の文、下手な比喩。それでも挫けずに書き続け、最近では、一応は小説の体をなすものが書けるようになったと思います。このたび賞を頂戴することができたのも、「書く」ことから逃げなかった自分へのご褒美のような気がしています。

「百錬自得」の精神は、場合によっては単なる根性論と受け取られ、あまりに過酷な立ち切り試合もまた、見る人に時代錯誤な印象を与えかねません。しかし、根性だけでは三時間という長丁場を乗り切ることはできません。基立ちの精神の根底には、道を究めたいという執念が潜んでいるはずです。誰も経験したことのない、過酷な試合の先にあるものが見たい。その執念が基立ちに力を与えているのではないでしょうか。私自身もいつか地平の先にたどりつくことを夢見ながら、これからも十年、二十年と小説を書き続けていきたいと思います。

最後になりましたが、この場をお借りして、本賞に携わったすべての方に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第3回ふるさと秋田文学賞　小説の部
ふるさと秋田文学賞佳作　受賞作品

直武、りんどうの恋

森川　瑠美子・作

直武、りんどうの恋

不忍池図　秋田県立近代美術館蔵

ぱちん。

子どもが小さな手を叩いたような音がした。

顔をあげると、雨があがっている。

窓の桟の隙間から見える鉢に、路地を駆けていった誰かが蹴った小石が当たったらしい。

欠けた素焼きの大鉢は、土を残して傾いたまま軒下に忘れられ、勝手に伸びたツワブキが勢いのいい葉を広げている。

ゆいは表へ出ると、ツワブキの葉を一枚、なるべく小さいのを選んでちぎった。そして淹れた茶を盆にのせ、その横に葉を添えた。

ゆいがこれから目覚めの茶を出す相手は、こんな添え物をいたく喜ぶ。そうと知ってから、ゆいは毎日道端で摘んだ草や、通りに陰をつくる木々の葉をちぎっては差し出すようになった。

台所に戻り、ゆいは盆を持って、奥の部屋に通じる障子を開けた。

北側に向いた部屋は、まだ薄暗く、布団は黒い陰となって盛り上がっている。ゆいはそっと畳の上に盆を置いてから、部屋に散らばったものを拾いはじめた。

美濃紙が数枚。半分ほど線が描かれているものもあれば、ほとんど出来上がっているのに、画の上に太い線で消されているものもある。昨夜も懸命に仕事をしたことが、部屋のよどみに

感じられる。

雨戸を静かに半分だけ開け、机の上を見た。数本の筆が硯の横にきちんと並べてある。筆を拭く布も、汚れたところを内側にして、押して折り目をつけたかのように畳まれている。

腕のいい絵師は、道具もぞんざいに扱わないと、ゆいはどこかで聞いたことがある。絵師に限らず、ていねいな仕事をする者はみんなそうなのかもしれない。ゆいは子どもの頃、近所に暮らす指物師や経師屋の仕事を見ているのが好きだった。そういえば、腕がいいと評判になる職人の仕事場は、すっきり片付いていたように思う。

机の上には、完成した三枚の画も、隅を重りで抑えて置かれていた。

ゆいは一枚一枚を、ゆっくりと眺めた。

どの画も、墨だけで描かれている。一枚は、足首から先を描いたもの。二枚目は人の背中を描いたもの。そして机のいちばん端に置かれているのは、裸の人を描いたもの。

足首から先を描いた画は、川原に落ちている枯れ木のようだと、ゆいは思った。甲の部分から、何本もの筋のようなものが上に向かって伸びている。爪の部分がなければ、とても人の足には見えない。

二枚目の人の背中を描いたものも、よく見なければそうとはわからなかった。ゆいは錦絵に

ある人の背中を、何度も見たことがある。けれども、この画は、それらの画とは似ても似つかない。肌が描かれていないのだ。そのかわりに、上から下に、ムカデの足のような線が何本も描かれている。左右の肩らしき場所には、細い枝のようなものが伸びて、肩とされている。

そして、もっとも奇妙なのが、三枚目の画だった。裸の人が描かれているのだが、腹が破れている。べろりと、まるで蜜柑の皮を剥いたように腹の表面がめくれ、中が露わになっている。

といっても、これは本当に腹の中なのだろうか。ゆいは人の腹の中など見たことはない。一度だけ、行き倒れの怪我人を見たことはあるが、腹のあたりから血が流れているのを見て逃げ出してしまった。絵草紙でも見たことがないし、錦絵にもそんなものを描いたものはないはずだ。

だから、これが、本当に人の腹の中なのか、ゆいにはわからない。べろりとめくれた中身は、ミミズのようなものがぐるぐると巻いていて、この上なく気持ちが悪い。

きっと、化物を描いているんだわ。

ゆいは机の横に重ねてある本をちらりと見た。いちばん上の本が開いたままになっている。そこには、机の上の画と同じ、べろりと腹がめくれた裸の人の画が描かれている。

机の上にある画と、本の中の画は瓜二つだった。こんなにもそっくりに描くことができるの

が、ゆいには不思議でならない。版木に下絵を写すときのように、元の画に薄い紙を置いて上からなぞっているのではない。この絵師が、見本を見ながら、面相筆で描いているのを、ゆいは知っている。

だからだろうか。描かれた線には勢いがあり、迷いがなかった。気味の悪いものなのに、どこか凛とした品位を感じる。

初めてこの絵師の画を見たとき、ゆいは息をのむほど驚いたものだった。それがいまではすっかり慣れてしまった。毎朝来るたびに、どんな画が描かれたのかを見るのが楽しみになったほどだ。

いや、画を見るのが楽しみなだけではない。この絵師に初めて会ったときから、ゆいは心惹かれているものを感じている。

ゆいの父親に、頼んだ仕事が終わるまで、絵師の身の回りの世話をする女を探してほしいと言ってきたのは、江戸では名の知られた、平賀源内という本草学者だった。源内は様々な顔を持つ学者で、めずらしいものを集めて薬品会を開いたり、戯作を書いたり、蘭学者とも親交があって長崎の事情にも通じていた。神田にある源内の家には、身分の高い武家から小商いを営む町人まで、源内の話を聞こうと様々な人々が出入りしていた。

神田で質屋を営むゆいの父親もそんな人々の一人で、近所に暮らす源内宅へ、暇があれば顔を出してご機嫌をうかがっていた。

はじめ世話をする女には、店の奥向きの用をしていたおまさが決まっていたのだが、話を決めて帰ってきた父親を追うように源内宅から使いが来て、できれば身元のしっかりした者を寄越してくれと言ってきた。おまさは決してあやしい者ではなかったが、話を聞くうちに、父親には源内の言わんとするところが飲み込めた。

世話をする相手というのは、昨年の暮れに江戸詰になったばかりの秋田藩士で、名は小田野直武。直武は、秋田藩では知られた絵師で、藩主の佐竹義敦（よしあつ）はじめ角館城代佐竹義躬（よしみ）に画の手ほどきをするほどの男だという。

直武が江戸詰になったのも、秋田藩上屋敷で藩の政務にあたる藩主から、江戸において、新しい画法の習得を期待されているからしい。新しい画法―それは、平賀源内が銅山開発のために秋田藩に招聘されたとき、直武に教えた洋画法だった。

だが、源内が頼んだ仕事というのは、顔料を使って洋画法で画を描くことではなかった。杉田玄白という名の学者が翻訳した阿蘭陀（オランダ）の医学書に、付図を描くことである。その付図は、人の身体の解剖図で、元の医学書から正確に写し取られたものでなければならない。

この仕事は、お上の法にふれるものではないが、画が出来上がるまでは内密にしたい。ゆいの父親が飲み込んだのはそのあたりだった。

となると、誰を行かせようか。

ゆいの父親は断りたくなかった。せっかく著名な学者が自分を頼ってくれたのである。

「おまえ、行ってくれんか」

おもねるような目で言った父親に、ゆいはすぐにはいと返事をした。嫁ぎ先から戻されて、鬱々とした日々を過ごしていた。世間の目から隠れるように暮らしていた毎日に、つくづく嫌気がさしていたときだった。

藩士の身の回りの世話をすることぐらい、なんでもない。二十五歳だという藩士の年が、ゆいよりも六つ下なのも、気楽だった。武家といっても若い藩士ならば、そう気難しいこともないだろう。

これが格式を重んじる奉公先なら、すぐに断っていたと思う。ゆいの嫁ぎ先は、気難しい家だった。出てくる数ヶ月前から話をしなかった夫は、三代続いている呉服屋の跡取りであるのを鼻にかけ、父親の代からはじめた商いであるゆいの家を、馬鹿にしていたところがあった。

秋田藩が絵師に用意した画室は、池之端仲町の吹き抜け横丁を入った路地にあるという。

「どれくらいの間？」
ゆいが訊くと、父親はほっとしたように顔を和ませたものだ。
「そう長い間じゃあるまい。画が仕上がるまでということだ」
「じゃあ、ほんのわずかな間ね」
「ひと仕事終えたら、一旦は、お国にお帰りになるだろう。お国には妻子が待っておられるということだから」
そう言ってから、父親はちょっと申し訳なさそうな目になった。独り身になった娘の落ち着き先を、この親はいつも案じてくれている。
「所帯持ちの方で、かえって気が楽です」
ゆいは笑ってみせたけれど、いまのゆいの気持ちを父親が知ったなら、また気を揉むに違いないと思う。日に日に直武に惹かれていく自分を、ゆいは持て余している。
直武が仕事をしているとき、台所や、ときには同じ部屋の隅で、紙の上を動く筆のかすかな音を聞いているときがある。そんなとき、ゆいはいままで感じたことのなかった安らかな気持ちになれる。出来上がった画を前に、新しい画法の話を聞いていると、いいようのない歓びに包まれる。

ああ、わたしはこの人に惹かれている――この人のそばにずっといたい――。
そんなゆいの気持ちを、父親はもちろん、直武も知らない。
何も気づかれぬまま、いつの日か、直武は北の国へ帰っていくだろう。
そう思うとき、ゆいは、見たことのない直武の故郷を思い浮かべる。

「おはようございます」
ふいに声をかけられて、ゆいは驚いて振り返った。
「すみません。まだお休みでしたのに」
布団から起き上がって、直武は眠そうな目をこちらに向けていた。鬢は乱れているが、布団の上に膝を畳み、すっくと背筋を伸ばしている。
雨戸をすべて開けて部屋の中に陽が入ると、直武は眩しそうに目を細め、それからゆいが置いた盆に顔を向けた。
「今日は、ツワブキの葉を持ってきました」
ゆいが言うと、湯呑を口に運びながら、直武は愛おしそうにツワブキの葉を手に取った。

「艶々としていますね」
「秋には黄色い花を咲かせます。とても鮮やかな黄色で」
その先を言いかけて、ゆいは思わずクスッと笑い声をたてた。
直武が葉に顔を近づけている。まるで葉の葉脈の一本一本まで明らかにしたいように、一心に見つめている。江戸が広しといえど、こんな道端の草を熱心に見つめる者はこの直武以外にいないだろう。
「お国には咲いていませんか」
布団を畳みながら、ゆいは声をかけた。直武の故郷は秋田の角館と聞いている。寒い土地だろうから、江戸ではありきたりの草花でもめずらしいのかもしれない。
「咲きますよ。こんなふうに艶々した葉を、よく見かけたものです。でも」
直武は愛おしそうに、葉を鼻先に持っていった。北国の人らしい白い横顔が、朝日の中で清々しい。
「江戸で咲いていると思うと、色艶が違って見えます」
直武が江戸に来たのは、昨年の暮れだったというから、そろそろ半年になろうとしていたが、江戸見物に出かけたという話を、ゆいは聞いたことがなかった。

この画室での直武の暮らしは、平賀源内から奇妙な画を描くことを頼まれてから、単調なものだった。ほとんど毎日部屋にこもって絵筆を取っている。仕事に疲れると、神田にある源内宅に出かけるが、長居をしてくるでもなく、どこかへ寄ってくるということもなさそうだ。ただ、源内宅から帰ってくると、それまでの疲れを忘れたように、生気を帯びてくる。源内宅で出会う人々に刺激を受けてくるようだった。

源内宅での話を、ゆいは具体的に聞いたことはない。直武の口から自然に出てくる名を覚えているだけだ。直武が頻繁に口にするのは、杉田玄白という名で、どうやらその男が、直武に奇妙な画を描かせているらしい。

「今日は神田のほうへお出かけになりますか」

いつもより多く仕上がった画のことを思い出し、ゆいは食膳を用意しながら、訊いた。

「そうですね」

そう言ってから、直武は表に顔を向けた。陽射しは明るく、雀の声もうるさいほどだ。

源内宅へ出かけたあとは、夕餉（ゆうげ）に食が進む。豆腐屋が来たら、いつもより多めに買おうと、ゆいは思った。今日はさっぱりと奴にしようか。それとも。

「案内していただけますか」

夕餉のことを考えていたので、直武が何と言ったかわからなかった。
「今日は神田はよして、江戸見物をしたいと言ったんです」
「はあ」
「ずいぶん慣れましたが、源内先生のお宅のある神田界隈と、杉田先生のお宅のある日本橋しか行ったことがありません。ほかのところへ行くとなると、ちょっと一人では心細い」
前掛けで手を拭きながら、ゆいは胸の動悸が高鳴るのを感じた。通いで直武の世話をするようになってから、一度も表で直武に接したことはなかった。ここへの行き帰り、きれいな夕焼けに富士山が見えたときなど、江戸を直武と歩いてみたいと幾度思ったかしれない。
「案内していただけますか」
はいと返事をすると、ふいに顔が赤らんで、ゆいは台所へ引っ込んだ。竈(かまど)の前にしゃがみこんで、必要もないのに、薪を火鉢で突っつく。
「見物の途中で、何かうまいものでも食いましょう」
ゆいの様子に気づくふうもなく、直武が言っている。ゆいはもう一度はいと返事を返したが、直武には聞こえなかったらしい。
浅草寺の門前は、たいした賑わいらしいですねえと、いつになくくつろいだ様子だ。よほど、

昨日の画の出来に満足したのだろう。

「浅草に行くなら、出乳母稲荷に行くがいいと、江戸詰の藩士に聞きましたが」

思わず笑いがこみ上げて、ゆいの緊張はとけた。出乳母稲荷は、乳の出がよくなるよう祈る稲荷だ。若い直武を、先輩藩士たちがからかったのだ。

ゆいが笑うと、直武は不思議そうに首を傾げた。

この人は、絵筆を取っているときは怖いような目をしているのに、普段は子どものように無邪気だ。絵筆を取って、じっと対象物を見つめるときのように、この人は真っ直ぐに人と接する。裏表がない。相手を疑うことを知らない。

そんなところが、自分を惹きつけていると、ゆいは思う。ゆいを追い出した夫は、それができなかった。人を疑うことを、得意としているようなところがあった。

「江戸では評判の稲荷だと聞いています」

笑ってゆいは返事ができなかった。

生真面目に、江戸詰の秋田藩士にすすめられた稲荷へ行くという直武を連れて、ゆいは浅草

寺の参道に向かった。
元黒門町を過ぎ、忍川を渡って、上野山下から新寺町へ抜ける。画室のある池之端仲町も人通りの絶えない町だが、上野山下を過ぎ、長く塀の続く静かな屋敷町を通ると、ふたたび人の流れは多くなる。
田原町に入るにおよんで、ますます賑やかになり、直武は目を瞠(みは)った。
「まるで祭りのようですね」
両側に寺が続く道を歩きながら、直武はめずらしそうに、行き交う人々を眺めた。参道へ向かう者たち以外にも、天秤棒を担いだ物売りや、商いの途中らしきふろしきに包んだ荷物を背負った丁稚(でっち)、籠かきもいれば走り回る子どもたちもいる。
ゆいには見慣れた風景だが、直武はときどき立ち止まっては、じっくりと眺める。直武は神田の源内宅へ向かうときと同じように、今日も画帳と矢立を持っていた。歩きながら、気に入った場所や人に出会うと筆を取るのである。
頻繁に立ち止まるものだから、浅草まで一刻はかかっただろうか。
直武が筆を動かしていると、人だかりができることもあった。背筋をぴんと伸ばした武家が、達者な画を描くのがめずらしいのだろう。一筆描きで何か描いてみせ、小銭を稼ぐ絵師とは違

うことが、行き交う人々の興味をそそった。

そんなとき、直武はまったく見物人を嫌がる素振りを見せなかった。いや、嫌がるもなにも、直武には描いている対象物しか見えていなかったのかもしれない。

そしてゆいも、また、直武を待つのが苦にならなかった。画が仕上がると、直武ははっと我に返ったように、ゆいを捜す。ゆいの姿が人に紛れて見えないと、小さな子どものように不安な目をしてあたりを見回す。そんな直武を見るのが楽しかった。神田で育ったゆいは、飽きるほどこの界隈に来ている。それが、今日は、はじめて訪れる場所のように思える。

人の流れに押されるように、参道に入った。ここに来て、いちだんと人の行き来が激しくなる。

手をつないだのは、どちらのほうからだったろうか。

見知らぬ人の肩にぶつかったり、ぶつからないように避けたりしながら、知らぬ間にゆいの手のひらは直武の大きな手のひらに包まれていた。絵筆を持っているとき、大きな手をした人だと思ったことがあった。その手が、すっぽりゆいの手を包んでいる。

左右に寺が並び、その境内に出店があった。甘味を売る店があり、水茶屋も多い。

並んだ水茶屋は、直武を驚かせた。

「こんなに何軒もの水茶屋が並んでいるのを見たのは、はじめてです」

棒立ちになった直武を、ゆいは微笑ましく眺めた。江戸に出てきた侍が、浅草の水茶屋を見て驚くのはお決まりのことなのだ。

「どうして、あんなに人が群がっているんです？」

数件の水茶屋に、侍たちが集まっているのが不思議らしい。

「――どうしてって」

ゆいは返答に困った。集まっている侍たちは、水茶屋の女が目当てなのである。

そのとき、二人が立った場所からいちばん近い水茶屋で、奥から女が出てきた。ホウとかオオッなどと、侍たちがどよめく。

美しい女だった。女が出てきた途端、ぱっとあたりが明るくなったように思える。涼しげな目鼻立ちと、透けるように白い肌のせいばかりじゃない。艶やかな風をまとったような動きも、その女を特別なものに見せている。

ゆいの手を握った直武の手が、ほんの少し緩んだように思われた。ゆいは水茶屋の女から目を反らした。群がっている侍たちと、直武に違いはない。

江戸見物に誘われて、浮き足立った自分が惨めに思えた。六つも年下の男が、自分などを気にかけるはずはない。そんなことは承知していたはずなのに。

――おまえは、なぜ、紅をささないのだ？

実家に戻されたとき、父親に言われた。

――男というものは、家の中でも身ぎれいにしていて欲しいものだ。

夫の心が離れた理由を、ゆいは何百編も考えた。考えて考えて、結局自分がいたらなかったのだと思うことにした。家の格の違いが気に入らなかったのも一つだろうし、自分が夫を満足させられる容貌でなかったことも理由の一つだろう。だが、本当は、夫の心が離れる前に、ゆいの気持ちが離れていたことが理由なんじゃないか。

商売に才のなかった夫は、店のことを、先代から勤めている番頭にまかせきりだった。それは、それでいい。

問題は、夫には、ほかに心をこめる何かがなかったことだ。何かに心をこめて暮らさなければ、人足寄場にいるその日暮らしの男たちと同じではないかと、ゆいは思う。立派な屋敷に住み、不自由のない毎日でも、それでは生きているとは言えないんじゃないか。

「愛らしいものですね」

直武の声に、ゆいは我に返った。

「愛らしくなくては、水茶屋の女はつとまりません」

「女じゃない、猫ですよ」
「猫？」
直武を仰ぎ見て、それから直武の視線の先に目をやった。水茶屋の横にある天水桶の上に、猫の親子が毛づくろいをしている。白に茶の斑の親猫が、子猫をしきりに嘗めている。
「猫の舌というのは、ずいぶん長く伸びるもんだなあ」
愛らしいと言っておきながら、もう観察する絵師の目になってしまっている。直武らしかった。そして、水茶屋の女よりも、猫に目をとめているのに救われた思いがする。
正智院の前に、ゆいは直武の手を引いた。
この寺は、寝ているお釈迦様を祀っていると伝えると、直武は是非見てみたいと言う。
行ってみると、お参りする人は多くて、なかなか近づくことができない。前へ前へと進もうとするからか、直武の手に力がこもった。
ずっとこうしていたい。
ゆいは思った。この人ごみが薄れたら、この人の手を離さなくてはならない。
強く直武の手を握り返して、目を閉じた。
人いきれがゆいの気持ちを正直にする。

いつまでも、この時が続いてほしい。

お釈迦様を拝む順番が回ってきたが、ゆいは顔を上げることができなかった。

「どうしたんですか」

直武が顔を近づけてきて、心配そうに目を細めた。けれど、直武の目には、心配以外の何も見えない。

「線香の煙にむせただけです」

実際、線香の煙は、青白く本堂を覆っていた。ゆいはわざとらしく小さな咳をひとつしてから、出口のほうへ直武を引っ張った。

「奥山へ行きましょう」

境内の奥には、松や桜が植えられた奥山と呼ばれる開けた場所があり、大道芸人たちが芸を競っていた。

「出乳母稲荷には行かないんですか」

直武が不満そうに、訊いた。

「もっとおもしろいものが見られるんです。出乳母稲荷よりも、江戸では評判です」

「おもしろいものというのは」

「独楽まわしや角兵衛獅子が見られます」
「それは、楽しみだ」
すっと直武の手が離れた。離された手を、ゆいはそっと胸元に持っていった。直武の背中は、前へ前へと遠のいていった。

獅子面を被った子どもが地面をはねるのに感嘆し、猿回しの猿がおどけたことをするのを見て笑っていると、陽は西の空に傾きはじめた。
小屋掛けの出店で、串に刺された団子を買って食べ、二人は参道前の広小路へ戻った。
家に帰るには右に行くが、自然と足は左に向いた。
川風が誘うように吹いている。
「川を見に行きませんか」
そう言ったのは直武だった。
「わたしは川を見るのが好きなんです。国でも暇ができると、川を眺めて過ごしたものですよ」
相変わらず人の行き来は激しいが、朱がかった空には千切れ雲が人の手で描かれたように、

西から東へ渡っている。
「お国にも大きな川があるんですか」
遅れないように歩きながら、ゆいは直武の横顔に問いかけた。
「桧木内川(ひのきないがわ)です。もちろん、大川ほど大きな川ではありませんが、美しい川です」
広小路から材木町へと進む。もう川はすぐそこで、船から材木を荷揚げする男たちの声が聞こえてくる。
「いいところですよ、角館は」
まるで独り言のように、直武は言った。
「三方を山に囲まれていましてね」
直武から故郷の話を聞くのははじめてだった。池之端仲町の家では、直武は画のことしか頭にないようだった。夢中で絵筆を動かしているか、休んでいるときは、見本の画に見入って深く考えに沈んでしまう。
川風の清々しさと、空の広さが、直武を饒舌(じょうぜつ)にしているのかもしれなかった。
「春になると、武家町の枝垂(しだ)れ桜(ざくら)が、それは見事です。武家屋敷が並ぶ通りには、何本もの枝垂れ桜があるんですよ」

「――何本もの枝垂れ桜――」
「桜は、わたしは、枝垂れ桜がいちばんと思います」
夢見るような目で、直武が振り返った。
「枝垂れ桜の下を歩いたことがありますか」
いいえとゆいは首を振ったが、直武はゆいの返事を待っているのではなさそうだった。
「風が吹くと、花をつけた枝が、頭上でゆらりゆらりと揺れるんです。それはもう――」
直武の夢見心地が乗り移ったかのように、ゆいもしあわせな気持ちになった。遠い北の国の遅い春に、枝垂れ桜の下を歩く直武の姿が見えるようだ。
「満開のときは、もちろんいい。けれど」
そして直武は目を閉じた。
「散りはじめたときの美しさといったら――」
行ってみたいと、ゆいは思った。静謐な北の町で、薄紅色のやわらかな花吹雪の中に立ってみたい。
道の両側の町家から、数人の子どもたちが走り出してきて、川のほうへ駆けていった。子どもたちの前には、土を運ぶ男たちの姿が見える。新しく大川に架けられる橋の普請（ふしん）の真っ最中

だ。

掛け声を上げながら土手を上がる男たちを避け、ゆいは直武を竹町のほうへうながした。そこからなら、普請の邪魔をせず、土手に上がることができるだろう。

土手を上がると、視界はいっぺんに広くなった。ゆったりと流れる川の向こうに、四ツ木村に広がる緑の田が見える。こんもりと木々に囲まれているのは、水戸様のお屋敷。田の間を筆で引いたように、細い川が流れ、寺の屋根瓦が光っている。

竹町の渡しの舟が行くのが見えた。その向こうを、帆を張った二艘の桁舟が流れるように進んでいく。

振り返ると、夕焼けの中に富士がそびえている。

「広いなあ」

目を細めて、直武はため息まじりに言った。

「これがお江戸ですね」

ゆいは直武の横顔を仰ぎ見た。肩をそびやかし、目を輝かせている。

「わたしはこの広いお江戸で、新しい画法を極めたいと思っています」

遠くを見つめたまま、直武が言った。

「源内先生に出会ったことで、わたしの絵は変わりました。そして杉田玄白先生から託されたあの阿蘭陀の画を写すことで、さらにわたしは掴(つか)んだものがあります」
ゆいに言っているというよりも、自分に言い聞かせているように、直武は続ける。
「藩主の佐竹様がそんなわたしを後押ししてくださっています。わたしは、秋田から新しい画を誕生させたい。わたしにはそれができると思う」
直武の向こうに、紅く染まった空があった。その紅い雲の合間に、わずかに青く残る空が覗いている。薄い、いまにも消えてしまいそうな青だが、どこか遠いところへ続いているような広がりを感じる。
直武は、あの青い空のようだと、ゆいは思った。
「ゆいさんには、本当にお世話になりました」
ふいに振り返った直武の目に、ゆいは思わず顔を赤らめた。
「わたくしなど、何も」
「いいえ。ゆいさんの気遣いで、どれほど仕事がしやすかったかしれません」
町家から駆けてきた子どもたちが、土手の上を走り回る声が聞こえた。兎を追いかけているのか、こっちだ、あっちだとかまびすしい。

「もうすぐ、阿蘭陀の写し絵が完成します」
川風がさあっと吹いて、足元の草が涼しげな音を立てた。
「完成したら、お国にお帰りになるんですか」
国には、直武のことを待っている妻と子どもがいる。それを思うと、ゆいの胸は、足元の草のようにざわめく。
「いいえ。わたしが江戸詰になったのは、新しい画を、藩主の佐竹様とともに極めるためなのです。まだまだやらなくてはならないことばかりだ」
「では、ずっと江戸にいらっしゃるんですね」
直武の身のまわりの世話をするのは、阿蘭陀の絵の写しをする間だけと言われているが、江戸にいるのなら、顔を見ることができるかもしれない。
「わたしは」
直武はゆいの手を取った。
「国に帰りたくありません。このお江戸でもっともっと見聞を広め、わたしの画に生かしたいのです」
握られた手は強く、熱い。

「わたしならそれができる。秋田から生まれた新しい画法は、いままでの画を変える力があるのです」

握られた手は直武に引き寄せられ、ゆいは直武の胸に倒れ込んだ。

「わたしなら、――それができる」

直武の胸元に顔を埋めたまま、ゆいは直武がそう何度も呟くのを聞いた。走り回る子どもたちの声も、橋普請の人足たちの掛け声も遠くなっていった。

夕餉の支度をしてほしいとか、出来上がった画の整理を手伝ってほしいとか、そんな理由を言われたら、ゆいは真っ直ぐ神田の実家へ戻っていただろうと思う。

それをするのが、嫌だというのではない。そんなことを言われたら、自分は目が覚めてしまう。目が覚めたら、好きになってはいけない相手であることを思い出して、直武の胸に飛び込んでいけなくなってしまう。

大川の土手から池之端仲町の画室まで、直武はひと言も口をきかなかった。唇を噛み締め、思いつめたような目をして歩き続ける。

そんな直武の後ろを、ゆいは歩いた。土手の上で直武に引き寄せられたときの狂おしい気持ちが、ゆいを黙らせている。もし何か言ったら、直武も目が覚めてしまうのじゃないか。それが怖い。

広小路に戻ると、すっかり日は落ちて、早々と提灯を灯して歩くものもいる。まだ木戸が締まるには間があるが、ゆいは顔を伏せるように木戸番小屋の前を通り過ぎた。

入口の土間に入り、草履を脱ごうとした途端、直武が後ろから抱きついてきた。ああと声が漏れそうになって、ゆいは手のひらで口を塞ぐ。

直武の手が、少し乱暴と思えるほどの力で、ゆいの胸元をはだけ、まさぐっていった。草履を脱いだ足先まで、まるで新しい血が通うように、何かが貫いていく。

振り返って、ゆいは直武にしがみついた。

今日だけ。今だけ。この人のものになりたい。

そのまま倒れ込んで、ゆいは直武に組み敷かれた。直武の手の動きに身体をまかせ、それから直武を導き、ゆっくりと受け入れていく。

きっと、わたしは、いつまでもこの人を忘れないだろう。

汗ばんだ直武の胸の下で声を押し殺しながら、ゆいは思った。

この人に忘れられても、わたしは忘れない。道端の草を見て喜んだ顔、懸命に絵筆を動かすときの思いつめたような目や、土手の上で力強く語ったときの輝く瞳を、わたしは忘れない。それは、わたしの中に残された大切な画のようなもの。

目尻から涙が頬に伝った。直武の指先が、労わるように頬を撫でていく。

涙が止まらなかった。かなしいのじゃない。こんなにも嬉しくて、涙が溢れてくる。

畳をいざる音がして、目を開けた。直武が部屋の隅にある行灯に向かっている。

油がジッと燃えるかすかな音がして、火が灯った。部屋の中があたたかい光で照らされ、壁に直武の影が大きく映る。

「あ」

全身が火のように熱くなった。着ていたものの前がすっかりはだけ、汗でうっすら濡れた身体を、直武の目にさらしている。

直武はじっと見ていた。ゆいの首筋から乳房へ、腹からその下の茂みを通って——。目が、ツワブキの葉をじっくりと眺めていた目と同じように輝いている。

蜜柑の皮を剥いたときのようにめくれた腹の中の画を、ゆいは思い出した。直武もいま、ゆいの身体を見つめながら、人の身体の中を覗いているのだろうか。

恥ずかしさも忘れて、ゆいはおかしくなった。この人は、いつも画のことに夢中だ。

ゆいが着物で身体を覆うと、すっと直武が立ち上がった。

「見せたいものがあります」

机の横にある大ぶりの画帳を手に取ると、直武はゆいの前に坐った。

「これは、わたしが近いうちに描きたいと思っている画の下書きです」

広げられた画帳には、鉢植えに植えられた白と薄桃色の芍薬が描かれていた。その芍薬が、不忍池を背景に、のびのびと咲いている。

美しい女のようだと、ゆいは思った。江戸で会った女たちを、直武は芍薬の花にして描いたのではないか。艶やかで、堂々としている。

不忍池には、弁天島も描かれていた。

ゆいには、この画を、直武がどこに立って描いたものであるかよくわかった。弁天島の木々の形や、池の向こうの森の様子で察することができる。

神田の源内宅への行き帰りに、直武は池のほとりを歩き、画を描いたのだろう。

「見事でございます」

思わず言って、ゆいは直武を見た。

「こんな見事なものを、わたくしに見せていただき光栄に存じます」
画を誉められると、子どものように肩をそびやかし笑顔になる直武である。ところが、目の前の直武は、ただ静かにゆいを見返している。
「ゆいさんは、りんどうの花のようだ」
一語一句をあたためるように、直武は言った。
直武がゆいの名を呼ぶことは、ほとんどなかった。それは、藩士と通いの手伝いの者という間を崩さないためだったのか、それとも、角館にいる妻のことを思ってだったのかわからない。だが、ゆいは不満に思ったことはなかった。
本当は気づいていたのだ。日々の中でふと目を合わせたとき、直武の目の中に、自分を慕う気持ちがあることを。
ゆいは、ふたたび画を見つめた。
大輪の芍薬の鉢の背後に隠れるように、小さな鉢が描かれている。その鉢には、りんどうが青い花をつけている。
「――わたくしが、りんどうの花――」
りんどうの花は、大輪の芍薬を、そっと支えるように咲いている。そしてりんどうの花の前

で、芍薬の花は、天を目指すかのように、生き生きと力強く描かれている。

「芍薬の花は――」

――直武さまご自身なのですね。

そう言おうとしたが、ゆいは涙で言葉が詰まってしまった。

忘れません。この生き生きとした芍薬の花を、あなたが目指そうとしている天があることを、わたくしは忘れません。

「阿蘭陀の絵の写しは、世間の人々を驚かす医学の書の付図となります。医学の夜明けに、わたしの画が助けとなるでしょう」

描かれた芍薬の花のごとく、そう言った直武は、凛として美しかった。

※「不忍池図」に描かれている植物は、手前から「シャクヤク」、「キンセンカ」、「セイヨウサルビア」であると言われていますが、本小説の作者は、紫の「セイヨウサルビア」を日本でもなじみの深い「リンドウ」に見立てて、直武をそっと支える女性の存在を描いています。

小説の部　ふるさと秋田文学賞佳作　受賞者のことば

秋田に恋して

森川　瑠美子

この度は、ふたたび秋田へお招きいただき本当にありがとうございました。

去年の入賞で訪れてから、すっかり秋田の澄んだ空気が気に入ってしまった私は、再度旅行を計画し、春の数日、秋田で過ごしました。角館の武家屋敷町を歩き、秋田内陸鉄道で阿仁に向かい、静かな山里でぼんやりと過ごしたのです。この段階では、もう一度「ふるさと秋田文学賞」に応募するつもりはありませんでしたが、ゆっくりと秋田をめぐりながら、好きになった秋田への私の片思いのようなこの気持ちを、物語にしてみたいと思うようになりました。小田野直武の画と

表彰式での森川さん

出会ったのは、そんな旅の途中です。「不忍池図」を見たときの感動は、忘れられません。後に、遠近法、陰影法など西洋絵画の技法、そして狩野派の影響も受けた画家が描いたものであることを知りましたが、作品から伝わるみずみずしい感性は、様々な説明を払拭してしまう力がありました。そこに私は、帰藩の翌年、齢三十一で急死したといわれる直武の無念と、過酷な己の運命を知らない希望を見ました。

拙い私の作品を、まずはじめに選んでくださった一次選考委員の山﨑先生にお礼を申し上げます。そして昨年に引き続き、真摯に真心を込めて批評をしてくださった、最終選考委員の先生方に感謝いたします。先生方のお言葉は核心をついたものばかりで、大変勉強になりました。また秋田に旅に出るつもりです。そのとき、どんな出会いがあるのか楽しみでなりません。

第3回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部
ふるさと秋田文学賞　受賞作品

山男と夫の贈物

石原敏子・作

山男と夫の贈物

宮沢賢治の童話が好きだ。

人が動物や植物と自由に言葉を交わして交流できる世界だ。あたたかくて切なくて涙が出てくる。自分の中に眠っている感情や、なつかしいものに出会ったような気がする。

ひとり田んぼに立っていて、涼しい風が吹いてくると、「すきとおった風」だと思い、雨上がりの山々を見て、「たったいまできたばかりのようにうるうるもりあがってまっ青なそらのしたにならんでいました」と賢治の作品の一節を思い浮かべることがある。すきとおったほんとうのたべものの一片を味わっているような気がする。

心惹かれる作品はたくさんあるがその中で「祭りの晩」という童話がいちばん好きだ。

村祭りの晩、亮二という少年は山男に出会う。普段は山の奥で狩りなどをして暮らしているが賑やかな笛や太鼓、屋台の灯りにつられて村へ降りて来たのだろう。山男は腹がすいて銭のないのを忘れて団子を食べてしまう。店の若者に怒鳴られている山男の足の上に少年は黙って白銅を置いてやったのだった。

その夜、亮二の家の庭先で大きな音がして栗の実といっしょに太い薪が山のように届けられた。山男からのお礼の贈物だ。少年は泣きたいようなへんな気持ちになってお返しに、「山男が嬉しがって泣いてぐるぐるはねまわって、それからからだが天に飛んでしまうぐらい、いい

ものをやりたい」と思うのだった。贈物をしたいと考える時、自分の気持ちが相手に届き喜んで受け取ってくれる贈物の原点はこれだと思っている。

私は農業に従事している。まだ現役で働いている。春先の稲の苗作りは緊張しながら管理をし、畑作の葱の栽培は雑草との戦いである。一回目の草取りを終えたらもう最初に入った場所を取らなければならない。

しかし、この日常はただ苦労なだけではない。作物を育てる楽しみやきれいになっていく畑を見て充実感や達成した喜びもある。

自然の中で働く生活から、久しぶりに街へでかけると胸が躍る。人々が行き交う賑やかな往来、あふれるように並べられた商品、ケースに並んでいるかわいいお菓子、なんと新鮮なのだろう。めずらしくてなんでも見てみたいと辺りを見回したりする。そんな時「祭りの晩」の山男もこんな気持ちだったのだろう。いま、自分は祭りにやって来た山男になっていると、肩をちょっといからせて歩いてみたりする。

私たち夫婦は、大潟村の第四次入植として四十六年前、長野県よりやって来た。ふるさとを離れたのが二十代のはじめだったから村での生活がずっと長くなった。この地に根を張ったと言ってもいいだろう。

大潟村は、生活と仕事である農業の場が離れている。住宅は総合中心地という場所に一ヵ所にまとまって役場や学校、商店などがあり生活に不自由はない。

湖を干拓してできた場所なので地盤が軟らかい。湖の西の端に生活の場を作ったのは水深が浅く地盤が堅い場所だったからだという。日本海中部地震の時、堤防や田んぼはひびが入って被害があったけれど、住宅は壊れることはなかった。建設した人たちの判断は正しかったといえる。

そのかわり、くじ引きで決めた田んぼの距離の差が大きい。近い人はすぐ行ったり来たりできるが私の家は十三キロメートル離れた東の地区にある。車で十五分くらいはかかるだろうか。

現在は携帯電話があるのでお互いの様子を知ることができるが、営農を始めてからかなりの年月は心配して夫の帰りを待っていた。暗くなっても戻らないと落ち着かずけがをしているのではないか、トラクターが沈んで動けなくなり助けを求めているのではないかと不安になった。そこで代(しろ)かき作業をしている時期、私が夕方家に戻って夜九時になっても帰ってこなかったら迎えに来る約束をした。

一回だけ夜の道を田んぼまで走ったことがある。両側のポプラ並木の道は昼とはちがう場所のようだ。いくら走っても同じ景色が続き、擦れ違う車もなくトンネルの中を地下へ降りてい

くような感じがする。夫がトラクターの下敷になっているのではと胸がどきどきしてきた。幹線道路から農場へ入る道をまちがえないようにして曲がったら、暗闇の中にトラクターのライトが光っていて、ちょうど作業を終えて田んぼから出るところだった。

安堵感で力が抜けた。

もう四十五年以上も前のことなのに忘れられない思い出がある。

あの時、心配して迎えに行ったと同じ春の晩のことだった。稲の苗が順調に育ち、田植えにむかって仕事が忙しい頃だった。耕起した田んぼに水を入れて代かきをし、仕上げに均平棒で平らにならす作業が続いていた。

長野県から入植した私たち夫婦は、親戚も知り合いもいないこの村で自分たちの力で営農をしていくのに必死だった。

その夜も夫は忙しかった。子供たちに夕食を食べさせて片づけが終わっても帰って来ない。また様子を見に行かなければと思っていた時やっと帰って来た。途中で軽トラックが動かなくなり歩いて来たのだという。寒さで鼻の先が赤くなり、頬は代かきの時跳ねた泥がついていた。髪は床屋へ行く時間がないので伸びたままだし、厚地の古いカーキ色の上着にも泥がついて白く乾いている。まるで「祭りの晩」の山男のようだとなんだかおかしくなった。そんな姿のま

ま包を差し出した。私のために買ってきたのだという。

その頃、私は台所の棚に置くラジオが欲しかった。天気予報を聞くことができるし、台所仕事をしながら聞けるのはどんなに楽しいだろう。夫にねだったことがあった。二十代の私はなんと慎ましく誠実であったろうか。

その日、夫は仕事を早めに切り上げて、旧琴丘町の商店街へラジオを買いに行ったのだった。田植えが終わったあと大きな街へ出かけた時でもよかったのに、どこでもいい、手に入ればというのは物に頓着のない夫らしいと思った。それを買っての帰り道、中古で買った軽トラックのエンジンが止まってしまった。ラジオの箱を抱えて夜の道を歩いて来たのだという。家からの四キロメートル位手前になるだろうか。車の中に置いて自分だけ歩いてくればいいのに、はやく私に手渡したかったのだろう。うれしいというより胸が熱くなり切ないような泣きたいような気持ちになった。ますます夫の姿は「祭りの晩」の山男の姿とだぶって見えた。

ラジオの入っている箱は、小さな町の商店の店先に長いこと置かれていたらしく、ところどころ茶色に変色していた。中から取り出したラジオは、オレンジ色のプラスチック製で、高さも横も十五センチ位で同じ色の足が付いていた。シルバーメタリックの外観を想像していたので、ずいぶん時代遅れのデザインではないだろうか。しかし、スイッチを入れると外観に似ず

明瞭な音が流れ出した。

ラジオは台所の水切りの棚の端にちょうどよい大きさで納まった。オレンジ色のラジオもかわいらしいではないか。

それから長い長い年月、台所に立つとスイッチを入れ聞きながら食事の用意をするのが日課になった。その場所が定位置となったラジオは、天気予報の時刻になると注意して耳を傾け、興味のある話題が流れると手を止めて楽しんだ。生活のリズムの重要な一員に加わったようなものだ。そして、このラジオを抱えて夜の道を歩いて帰ってきたことを想い、胸の奥が温かくなるのだった。

どれくらい楽しんだだろうか。そこにあるのがあたりまえのようになり、ラジオがやって来た夜のことも思い出すこともなくなった頃、ボリュームを上げても音量が低くなり聞きとれなくなった。

電気屋に修理に持って行ったら、古すぎてなおすことができないという。聞こえなくなったラジオは棚からおろして私の部屋に飾っておいたが、家の中を整理した時思いきって処分した。いつまでも物に執着するのはよくないことだ。

夫は七年前、心臓の弁が機能しなくなったので金属の人工弁に取り替える手術をした。それ

以来、赤い表紙の第一級の障害者手帳を常に携帯するようになった。そして一日三回食事のたびに驚くほど多量の薬を飲んでいる。夫の胸には七年たった今でも、手術の傷跡が朱色の筆で上から下へおろしたように赤く残っている。加齢のせいもあるけれど体の筋力がしだいに弱くなり気力も衰えてきた。腰を曲げておぼつかない足取りで歩く姿は年齢よりずっと老けて見える。

私は夫のそんな姿にむかって「胸を張り、腰を伸ばす。一歩一歩ゆっくりと地面を踏みしめる！」と叱咤激励する。胸を張ると傷がひきつれるし、腰の骨が減っているので、伸ばすと痛いのだと言い返してくる。そんなことの繰り返しが続いている毎日だ。

椅子に座ってぼんやりしている夫に、元気な頃のおもかげを探してみる。いつのまにか入植して四十六年がたっている。ずいぶん長いこと頑張って働いてきたではないか。老いていくのは人間の摂理だ。できるだけの治療をおこなったなら、やむをえないではないか。

ふり返ると、たくさんの出来事があり二人で乗り越えてきた。しかし、思い出にひたり感傷的になるのは好きではない。

私の心の中に、二十代の若かった夫から贈られたラジオの思い出はずっと残っている。その事が夫を守ってやろう、まだ頑張ることができると、生きる力を与えてくれている。

随筆・紀行文の部　ふるさと秋田文学賞　受賞者のことば

楽しくて苦しい、苦しいけれど楽しい

石原敏子

私の故郷は、長野県旧真田町です。群馬県との県境に近い小さな集落で、幼い時から山に囲まれて育ちました。初めて海を見たのは小学六年生の修学旅行の日本海です。

信州人は「あの山のむこうに何があるのだろう」と思って暮らしているのだと聞いたことがあります。ほとんどの人は、出かけていって見てきた後、戻って故郷に根を張るのですが、私は山のむこうに何があるのかを確かめるために、勢いよくジャンプして飛び越えたのだと、今頃になって気がつきました。

着地した場所は、秋田県大潟村、八郎潟干拓地です。第四次として

表彰式での石原さん

同郷の夫と共に入植しました。ここは八郎潟を干拓してできた湖底の村です。山も丘も大きな木もなく、海抜はマイナスで、しじみ貝のかけらが混じった平地がただ拡がっていただけなのです。頼りなく体の重心が定まりません。自分を閉じ込めていると思っていた山々に、守られ抱かれていたのでした。海抜九百メートルの地からマイナスの場所の変化に馴染むまでは、時間が必要でした。

入植して四十六年になります。軟弱地盤との戦いであり、農業機械の進化を目の当たりにした年月でありました。そして目まぐるしく変化する農政に翻弄された歳月でもあります。

大自然の中で働いていると、自分の存在が小さすぎてわからなくなります。私にとって書くことは、気持ちを整理し存在を確認する作業です。一日の農作業が終わり机に向かうことは、動物や鳥が全力疾走したあと体や翼を休める時の動作と似ています。好きなことは人さまざまであり、野の花や植物の露を写すためにいつもカメラを覗いている人や、手仕事が好きで古い布から次々と何かを作っている人もいます。それと同じように、私は書くことが好きです。

書くことは楽しいけれど苦しい。苦しいけれど楽しいことです。これからも自分が今、生きていることを確認するために書いていくつもりです。

第3回ふるさと秋田文学賞　随筆・紀行文の部
ふるさと秋田文学賞佳作　受賞作品

こまちの旅

遠藤　美弥子・作

こまちの旅

写真提供 / 秋こま

三月の朝

こまちの車窓から、次第に明けていく空を見ていた。空が明るくなるのと一緒に、雪の色も明るくなっていく。地平線に朝日が輝く。娘の部活の弁当作りでこの季節に朝焼けを見ることは多いけれど、こんな風に、太陽が上るのをじっと眺めているのは久しぶりだ。

三月に入ると、雪の固まり度が（そんな言葉ないかもしれないが）、緩んだように思う。二月の雪は、固くて青くてガラスみたいだ。三月になると、雪はちょっと明るい色になり、木の周りで窪みはじめ、なんとなく、ふわふわした景色になる。

そのふわふわした雪原がどんどん明るい色に変わっていく中を、こまちが走っていく。

昨日の昼まで、父の入院している千葉の病院にいた。父の容態が落ち着いたようだったので、夜遅くに秋田に戻ったら夜中に病院からの電話で起された。父が喉に何かを詰まらせ、それから大変容態が悪いらしい。実家には八十歳になろうとしている母しかいないので、朝イチで、またこまちに乗ったのだった。

ここ半日、家に滞在している時間より、こまちに乗っている方が長いわけだな。

子どもが産まれてからは、年に二回位しか実家に帰らなかった。それがここ数ヶ月、父の具合が悪くなり、さらに、入院してから、毎週のようにこまちに乗る。車窓も毎週見ていれば、小さな移り変わりも見えてくる。あの木の枝、折れたのかな、とか、雪解け水で川の幅がこないだより広いかな、とか、先週も見たけどちょっと変わった、と思える風景が、窓の外を流れていく。

父はいつまでいてくれるだろう、と朝日にそまった雪野原を見ながら思う。つい先日、父の介護保険のことで実家に泊まった。夜、二階の自分のベッドに横になって、階下には布団を並べて両親がおり、守られて眠るなんて幸せだな、と思った。父自身は、実の母に六歳で死に別れたそうだ。守られて眠れる夜がまだまだ続きますように、と思っていたのに。

五月の午前

水の流れがずいぶんと幅広くなった。ついこの前までは、白い雪の帽子を厚くかぶった石の間を細く、でも挑戦的なしぶきをあげて流れていたのに。まだ芽吹いたばかりの木々は、形も、若芽の色も、一つ一つ全く違う。もう少したつと、木々は緑のバリエーションの固まりになり一本一本の違いはわからなくなる。

東北大震災が起きて、しばらくはこまちも止まって、千葉に戻る手段が飛行機だけになった。飛行機は速いようだけれど、搭乗手続きとか、リムジンの待ち時間とか、どういうわけか秋田行きだと必ず乗らなくてはならない飛行機までのバスとか、ロスタイムが多い。こまちなら、乗ったらまるで自分の部屋にいるように、好きな事ができるから楽だと思う。

こまちがいつもより一時間多く時間がかかりながらも復活した時に、私もこまち客に復帰した。

いつもよりゆっくり走るこまちのおかげで、盛岡でも、仙台でも、今までは飛んで行くようだった窓の外が、はっきり見えるようになり、ブルーシートを掛けた屋根が思ったよりも多いのに気づく。でも、たかが一時間、されど一時間。月に四回以上行き来する身には、往復二時間増しの移動時間は、なかなかハードだ。

母は、一人では暮らせなくなるかもしれない。父が亡くなったことをわかる日もあればわからない日もある。帰る前に、三日分くらいにと作ったおかずが全部なくなっているかと思えば、何も手をつけず、代わりに三日前に買っていれたはずの紅ショウガの袋が消えていたこともある。食べかけのトーストが四つも五つもむき出しのまま、冷蔵庫に突っ込んである。ポテトサ

ラダの入った皿が食器棚にある。

身の周りのものが何もかも無くなる、と訴えてくる。私が探せば、包丁は食器の引き出しから、布巾は食品の引き出しから、洗濯ネットは布巾の箱の下から出て来た。

父が亡くなって、一人暮らしは物騒だからと入れたホームセキュリティは、こんなものは外せ、と怒るし、携帯電話は、少し前までメールでやり取りできたのが、ショートメールになり、携帯電話からの通話になり、今では、母の携帯から家の固定電話にかかってくるだけになった。

地域包括センターの方達に相談しながら、母のデイサービスを増やそうと思う。デイサービスにいる間は、他の人が母を見ていてくれ、話をしてくれる。

それ以外の日、母の電話は一日に三十件を越える。「久しぶりだから」「どうしているかと思って」「元気？」と直前に電話してきたことを全く忘れるようになってきている。

十月の夕暮れ

この時間に東京に向かうのは今回が初めてかもしれないなと思う。

空は明るいのに、夕暮れの山の木々はもう鬱蒼とした夜のたたずまいだ。だんだん日がくれて、家の灯りがはっきり見えると、家の中でテーブルに食器を並べているのや、映っているテ

レビの番組までわかる。でも、すぐもっと暗くなって、外の景色よりも窓ガラスに反射する車内の方がよく見えるようになっていく。

遅く着くと不安がる母のために、いつも午後四時前には千葉に着くようにこまちに乗っていた。でも、急に夫の入院が決まって、入院説明とか聞いているうちに、ふと気づけば十六時台のこまちがやっとの時間になってしまった。

母のことで、私が千葉にもどるのがここ半年頻繁になった。次女が高校生の時には、夫は部活の送り迎えから、お弁当まで作る模範お父さんだった。でも長女に続いて次女も東京に進学し、一人の時間が増えた夫は、毎晩居酒屋で羽を伸ばしすぎたのか、不規則な生活がたたったのか、急に両膝に力が入らなくなったらしい。千葉から戻り、玄関をあけたら、マンションの廊下を逆光の中「貞子」よろしく這ってくる夫がいて、私は冗談でなく悲鳴をあげた。整形外科に行ったら「肝臓も腎臓もだだもれ、いいとこ一つもない。これは内科です」と総合病院を紹介された。そこで検査をしたら、なんと入院を宣告されてしまった。そんなにひどいとは思っていなかったので、この日の午後には千葉に行く予定でいた。母は、もう予定の変更を理解する能力がない。そこで遅くなってもとにかく行く事にして、「これで足りないもの病院の売店

で買って」と歩けない夫にパジャマと二千円だけ渡して、駅に走った。その夜、九時を回ってようやく実家についた私を、母は睨みつけた。

「どうして、こんなに遅く来たのっ？」

「だから電話で何度も説明したでしょ、夫が入院したの」

「どこが悪いの？」

「まだわからないから入院して検査なの」

「だからって、こんなに遅く。もう、ご飯もすんだわ」

それでも母は私を待っていてくれたらしく、ご飯、ピーマンを網で焼いて醤油をかけたの、きゅうりを1センチ角に切って醤油につけたの、それに煮物が並んでいた。煮物の形が妙にきっちり同じ大きさだ、と見たら、明らかに「ふじっこの煮物」だった。それをまた、煮直したらしく、色は真っ黒だった。

母は、たぶん料理ができなくなったのだと思う。

十一月の昼まえ

木々が色づき始めた。紅葉の色は、本当に一本一本違っていて、今まで大きな緑の固まりだっ

た木々が、どんな種類の木なのか、どんな風に育ったのか、それぞれ自己主張しているみたいだ。ついこの間、大風が吹いたためだろうか、結構大きな木が横たわっていたり、枝が折れたりしている木々の中をこまちが進んで行く。緑の若葉にお日様がキラキラする季節もきれいだけど、紅葉はまた、なんだか大人のしっとりした美しさを見るようだな。

母が急に「みずのさんはどうしたかしら」と言い出した。その名前に覚えがないので聞き返すと「ほら、あなたも知ってるでしょ、じじのところによく来る人よ。じじがほんとうに好きだったのはみずのさん」

父には結婚前、母の他に付き合っていた人がいた、という話は聞いた事があった。父と母は一時同じ職場にいて、みずのさんも同じ会社の人だったらしい。父より年上だったと聞いている。その人が、母との結婚が決まったときに、父に話をつけに下宿に乗り込んできた、とか。それを父の母代りだった人が追い返した、とか。何か武勇伝のような話だと思っていた。

その「みずのさん」が、父の晩年によくこの家に来ていた、と母が言い張る。

父は高度成長期のサラリーマンとして、札ちょんも博ちょんもやった。一度も間違いがなかっ

たとは言えない。それらしいことで父と母がもめたのも覚えている。でも、浮気、ではなかったと思う。父が早くに実の母を無くしたことは知っていたが、亡くなってすぐに二度目の母がきていたことを、父の戸籍を取り寄せて初めて知った。一番上のお姉さんはお母さんが違う、と父が言っていたような気がする。そういう難しい家族だったからなのか、父は基本的には、家庭をとても大事にしていた。

父がどのくらい母を愛していたのか、もう知ることはできないけど、「ままは、まじめだから」とか「歯がきれいだ」とか照れ隠しのような言葉で母を褒めていた。「ままはずっとスカートだったから、結婚するまで、もっと上の方まで足だと思っていた」とか、いらんこともたくさん言った。父の口から「みずのさん」の話を聞いたことはない。

その「みずのさん」がこの家に現れた、なんてことは絶対にないと思う。父は会社も変わった。半世紀以上も父の消息を追いかけ続けたなんてあり得ない。

「あなたも知ってるわよね。じじの好きだった人」

知らないと思う。だって産まれてないもの。

「じじは、ここにみずのさんを呼んだのよ」

ありえない。私には、父がその人のことを覚えていた、とも思えない。覚えているなら、博

多でもめた芸者さんのほうが自然だ。
「あの人、よくそこの庭から入って来たわ」
私は一度も会ったことない。
「それはそうよ。あなたはいつもここにいたわけじゃないし」
そもそも、そんな人がいるとは思えないんですけど。
「だって、じじは何も言わないで死んだのよ。何一つ残さないで。だからみんなみずのさんに残したのよ」
それは、あんまりじゃないでしょうか。ここまで母一人に生涯を捧げた人なのに。私のかけがえのない父なのに。だいたい、母の言う人は確か父より年上だから九十歳くらいのおばあさんだよね。そんな人が一人で来るか？どんな様子だった？
「おおきくて、えらそうで、庭から入ってきていつもじじとうれしそうに話していく」
父が寝込みがちになって、私が幾度も千葉に通うようになった。ある時、庭から、ガラス越しに布団で寝ている父に手を振ったら喜んでくれた。だから私は、度々玄関からではなく、庭から上がった。私の身長は母より十センチ位大きい。
では、母の言っている浮気相手って、もしかして私のこと？

「みずのさんよ、あの」
「そんな人は知らないし」
と言うと、急に怖い顔で叫んだ。
「私だってしらないわよ、あんなにしんねりむっつりした人は。ほとんど話したことない」
この話は父と私と、両方を貶めていると思う。認知の人の話はすべて認めてあげて、と介護士さんから言われたけれど、この話を認めることは絶対にいや。生理的に無理だ。

春のこまち

水田の水がきらきら光って、空をうつしている。もう少し稲が育つと、一面の緑の海になるけれど、稲の背の小さい今頃の方が、本当の海のように見える。

水田の間に所々、こんもり木が茂っているところがある。この前、夫と車でその辺を通った。たいていは家の周りを木が取り囲んでいるのだが、たまに、家の無いところに、木の茂みがある。そういうところをのぞくと、祠があったり、小さな神社があったり、時には巨大な村を守る藁人形が祀ってあったりする。田んぼを見守る「しょきさま」とか「かしまさま」と呼ばれる藁でできた二メートル以上ある巨大なお人形さんが、大きな木によりかかって立っている。

雪に覆われていただろう藁の身体は、ぐずぐずになりくずれそうだ。それでも、お人形さまは、穏やかに村を眺めていた。こまちの窓からは見えないけれど、たぶん、木立の中のどこかに、相変わらず静かに村を守って立っているのだろう。

母の食欲がなくなったとホームから連絡が来た。食事に興味がなく、促せば食べるが、自分から箸を動かそうとしないらしい。

母は偏食だ。認知になってからなのか、昔からだったのか、家ではトンカツと酢豚とかぼちゃの煮物は食べるが、あとは口にしない。みそ汁もサラダも酢の物も手つかずだけならまだしも、皿で混ぜ合わせた上、三角コーナーにバサッと捨てる。レタスのサラダが大好きな次女は、残すならもらおう、と思っている間に捨てられる、と悲しそうに言っている。別に時間をかけて作ってるわけでもないから、さっさと片付けられても構わない、とも思うが、私が作って母が惜しげも無く捨てるのは腹が立つ。

その母がトンカツを残すようになった。認知は食欲そのものがわからなくなっていくのだそうだ。いずれ食べられなくなるから、その時には胃ろうをするかしないか、家族の方に決めておいてもらって、という主治医からの指示もきている。

父は、抗生剤を口から飲めなくなったので、入院して点滴をつけた。まさかそれで、当人が口から水分もとれなくなった後で、生きる事を強いることになるとは思わなかった。口の乾きから、蒸気の噴霧を待ちこがれ、枕元のネブライザーの機械をがりがりとひっかきながら、息をはあはあさせていた父。血圧が不安定になるからと水を飲ませるのも禁じられた父。あのような苦しさを母に経験してほしくはないし、見たくない。

でも、私は母を実家に外泊させながら、笑いかけることができない。会っても、何かと母に腹を立てている。母の言うことをまるっきり信じていない。そんな私が、母の人生を、何をどう決めればいいのだろう。

夏のこまち

日差しが厳しくなると影もその分濃くなる。もうすぐ夏本番だ。町ではあちこちからお囃子の練習の音色が響いてくる。銀行の駐車場や、各種会館の前の広場のような場所とか、こんな場所あったんだ、と思うような狭いところでも、竿燈の差し手が練習に励んでいる。

祭りの準備で生き生きする秋田の町からまたこまちに乗って千葉の実家に向かう。

去年、竿燈を眺めながら、母には一度もこの祭りを見せてあげられなかったなと思った。竿燈の先につけられた白い御幣の向こうに、夜空の赤い星が見えた。火星かな？蠍座かな？はっきりはわからなかったが、あの星の光がこの地に届く時間と、竿燈が続いている時間と、どっちが長いのかなと思った。

両親はどちらも旅行好きではなかった。竿燈も何度か誘っては見たが、それほど乗り気ではなかった。竿燈中は泊まる所を探すのも大変なので、行きたい、と言われないのをいいことに、一度も呼ばないまま今日に至っている。一度くらい、夜空に一斉に立ち上がる光の稲穂を見せてあげればよかったかなと思う。

琴座のベガの光は地上に届くのに千年かかると聞いたことがある。空の上の時間の流れは、とてもゆっくりだ。

私にとっては、一年が巡るのが速い。母がホームで過ごす日々も、まる二年を越えた。

母に会いたくてこまちに乗るのかどうか、もうよくわからない。これが習慣になってしまっただけ。あるいはいい娘を演じるまねをするだけ。あるいは母の老いを観察して、自分の対策の材料とするためかもしれない。

家にいる間の母は、包丁を逆手に構えたり、反対に私に土下座してみたり、やることはまっ

たくめちゃくちゃだ。激高して「ふざけんじゃない！」と怒鳴る姿を見ると、もう母とは思えない。私のお気に入りの人形を、私が眠っている間に夜なべしてすっかり着せ替えてくれた優しい母は、もうどこにもいない。

それでも、同じ世にいるのだから、会う機会をつぶすことはしたくないと思う。もう、何をしてあげることもできないのかもしれないけれど。もう、母は私に会っても会わなくても、どちらも覚えていてはくれないけれど。

母であった頃の母に会いたいと思って、こまちに乗る。こまちは、窓に一年の季節のめぐり通りの景色を映して、私を運んでくれる。

母が母として私を迎えてくれていた頃とほとんど変わらずに。

人間の持ち時間って、自分が思っているのより短いなと思う。その持ち時間の何割りかをこまちに託して、また次回の切符を買いに行こう。

随筆・紀行文の部　ふるさと秋田文学賞佳作　受賞者のことば

認知も母の贈り物

遠藤　美弥子

この度は、私のつたない文章をこのように評価していただき、本当にありがとうございます。

私は一人っ子で病弱で、母に何もかも頼る子どもでした。母は私のために、夜更けの学校に一緒に宿題を取りに行ってくれ、閉店した文具店の母屋を訪れコンパスを買って来てくれ、スーツを新調して楽しみにしていた同窓会を、お腹をこわした私のために欠席してくれました。

先日、母の幼なじみの娘さんが母を訪れてくれました。母に会いたがっていたというその方も認知になり、彼女を避け、施設のスタッフ

表彰式での遠藤さん

さんにだけ笑顔を見せるのが辛かったそうです。「でも、うちの娘たちの数学の宿題からお弁当まで何もかも手伝ってくれていた母が急に亡くなったら、私は耐えられなかった。母が何年もかけてゆっくり母じゃなくなってくれたから、亡くなった時に、それほどショックを受けずに済んだと思う」と話してくれました。ああ、母達は亡くなる時も、優しいのかもしれない、と思いました。もしも母が急に亡くなったら、どうしていいかわからない弱い私のために、私の母もまた、少しずつ逝くことを選んでくれたのだと思いたい。私が「そうなんでしょ？」と問えば、きっと「そうよ」と笑ってくれるような気がします。私はまだ母に甘えています。そう思った方が楽なのは私なのですから。そう思って、ゆっくり逝く母に、できるだけ寄り添う時間を作っていきたいと思います。

選

評

タイトルからが作品

内館牧子

この「ふるさと秋田文学賞」も三回目を迎え、県外にもその名が浸透し始めたことがわかります。応募者を見ますと、秋田県内からが三十七編、県外からが五十編。県外の方が多く、これは嬉しい驚きでした。アメリカからも一編届いています。

応募者はテーマを決め、取材や調査をし、構成を立てます。そして執筆し、推敲し、決定稿に仕上げるわけですが、この作業は楽なものではありません。書いたり消したり、行きつ戻りつです。そして、作者はその間ずっと、秋田を身にまとっている状態です。秋田は作者の中で熟成していきます。それは秋田という地にとって、とても幸せなことです。その地の魅力は、身にまとった人が誰より深く豊かに伝えられると思うからです。県内の人はもとより、県外や海外にそんな方々が増えつつあるのは、嬉しい驚きです。

私たち三人の選考委員は、自身が書くものも、興味の対象も、好みも、相当違います。同じ応募作に対して、1をつける選考委員もいれば、5をつける委員もいます。そこから、なぜこ

の作品が1なのか、5なのかを議論して決めていくのですが、時には「あなたの言い分は理解できるけど納得できない」とか「何と言われても、この主人公は私のタイプどまん中だ」とか、後になって考えると笑える言い分も出てきます。

ただ、興味深いのは、魅力のない作品は三人ともピシャリと一致することです。それらは早々と圏外に行くことになります。

さて、今回は小説の部も、随筆・紀行文の部も、文学賞受賞作はこれだと、三人の評価がすぐに一致しました。

「小説の部」では、神奈川県藤沢市の岩井圭吾さんの「たちきる」です。剣道の実業団選手である「おれ」が、三時間立ち切り試合で基立ちを務めるため、故郷の湯沢に帰ってきます。川連漆器の胴を締め、真冬の体育館で過酷な三時間ぶっ続けの試合に挑むのですが、剣士として乗り越え難い父や、亡くなった母がからみ、読む者を一気にその世界に引きずりこみます。

話もいいのですが、登場人物の心の動きやキャラクターがよく描けており、かなり書いている人ではないかと思いました。

佳作の「直武、りんどうの恋」は一人が非常に評価し、一人はあまり評価せず、もう一人は破綻はないが新し味のない話で、少女漫画の原作のようだと言いました。ただ、構成のうまさ

と小説らしさが評価され、「たちきる」と共に、合計点は他に差をつけました。作者の森川瑠美子さんは前回もいい作品を書いておられ、書き続けてほしい方です。

随筆・紀行文の部は、石原敏子さんの「山男と夫の贈物」がひとつ抜け出していました。この作品は自身の農業生活と、宮沢賢治の童話「祭りの晩」をからめたもので、とてもいい随筆になっています。

「祭りの晩」には山男が出て来ますが、作者は折々に山男を思い、重ね、読む側も山男に情が移ってくるあたり、みごとです。ただ、私はラストにも山男に関する視点があれば、言うことなしだったと思います。

佳作の遠藤美弥子さんの「こまちの旅」は情感の漂う随筆です。認知症の気配が出てきた母の介護のために、作者は住んでいる秋田から年に三十回以上、秋田新幹線「こまち」に乗って千葉に行きます。母親がかつての姿を失っていく中、春夏秋冬の窓外を眺める作者。その心理と情景描写がとても繊細に書けています。病気だった父の生前から、作者はこの生活を続けており、千葉の家で、「二階の自分のベッドに横になって、階下には布団を並べて両親がおり、守られて眠るなんて幸せだな、と思った」という一文は秀逸でした。

他に小説の部では、私個人は山北登さんの「農村カメラマン」も面白く読み、随筆・紀行

文の部では岩橋洋子さんの「ふるさとの岸を離れて」に驚かされました。これほどの文章を八十五歳の方が書かれたことに圧倒されます。黄八丈に絞って書けば、いいところまで行ったと思います。

応募作全般に、タイトルがひどくてあきれるのですが、今回は少しいいとはいえ、もっと考えて練ってつける必要があります。タイトルからが作品なのです。それを忘れずに、タイトルに思いを込めて下さい。

〈脚本家　秋田市出身〉

人を描くこと

塩野米松

小説でもエッセイでも、読み手に疑問を抱かせてはいけません。

時間の経過がどうなっているのか？

この人は誰なんだろうか？

なぜ突然にこんな言葉が出てきたのだろうか？

どこか読み落としたのだろうか？

こんなふうに思うと前に進めず、元に戻ってどこか読み落としがあったのではなかったかと探さねばなりません。その結果、どこにも読み落としがないとわかったときには、気落ちし、その文章を読むのが嫌になります。

魅力的な文章はまず、すーっと読めることです。引っかかりがなければ、登場人物の魅力にひかれて、夢中で読むことができます。

ストーリーのおもしろさは物語においては欠かせない重要な要素です。しかし、五十枚の制

約のある短編の中では複雑な構成は無理です。シンプルに言いたいテーマを絞って構成します。

大事なのは人をきちんと描くことです。読みながら登場人物の姿や動作、表情、心の内の葛藤がわかることで、読み手は納得し、心を打たれ、作者が何を言おうとしたのかがわかるのです。

小説部門の受賞作は、選考委員3人とも岩井圭吾さんの「たちきる」を推しました。3時間過酷な試練に耐える剣士の姿を描いたものです。まずテーマがいいです。それとご自分の得意とする分野に読み手を引き込むというのがいいですね。

亡くなった母親のことや、定年退職後の放心したような父親を少ない言葉でいいですからもう少し描いておくと作品に深みが増したでしょう。父親は七段という猛者。その父の激しい打ち込み。倒れそうになる自分に次々に容赦なく襲いかかる友人達。その中でもがく主人公の姿が心をうちます。敢えて言えば、主人公の都会での日常も入れておきたかったですね。そうすることで心に抱えているものが重層になって作品の味が深く、印象的になります。カメラで言えば、広角とクローズアップの使い方です。素晴らしい将来を感じさせる作品でした。

「直武、りんどうの恋」の森川瑠美子さんは前回に続いての佳作でした。力のある方だと思います。読み始めたときには、これぞ小説と期待させられました。小田野直武という絵師とその

世話をする女の話ですが、こういう物語は登場人物をいかに魅力的に書けるかで評価が大きく異なります。直武が癖があり、魅力的ならそれに惚れる女も美しくなります。そこが描ききれない紋切り型になってしまったので魅力を減じました。力があるのですから大胆に人物を作ってみてください。

エッセイの部門の受賞作は「山男と夫の贈物」。石原敏子さんの作品です。異議なしの授賞でした。大潟村に入植した夫婦が過ごしてきた四十六年が目に浮かびます。手書きの原稿、一文字一文字をしっかり清書してあります。まだ拙いところもありますが、仕事の後のわずかな時間、夕食の後に残してある大事な自分の時間に、筆を執っている姿が浮かびます。書く楽しみを味わいながら、思いを込めて記憶の底をさぐりながら一文字ずつ綴る。文章を書くということはこういうことです。この後も書き続けてください。

佳作は遠藤美弥子さんの「こまちの旅」。秋田に家族が居て、千葉に居る実母に認知症の気配が。そのために一年に三十回も新幹線で往復をする自分のことを書いた作品です。盛り込みすぎですね。どうしても事実に押され、整理がうまくできません。そうすると説明の文になってしまいます。幾つかの象徴的な話題にしぼって整理したら効果的になります。冗漫になった

ため、もどかしい思いがありますが、体験したから書ける本心や戸惑い、哀しみがにじみ出ています。そこが授賞の要因でした。もっと書いていくと、整理や構成が面白くなってきます。頑張ってください。

タイトルも大事な作品のひとつです。応募してくれたほとんどの作品がタイトルに工夫がありませんでした。即物的で、説明文的なものばかり。上手なタイトル作りが作品を仕上げていく上で気持ちをかき立ててくれますし、読み手に期待を抱かせます。よく考えてはっとするようなものを期待しています。

〈作家　仙北市（旧角館町）出身〉

読みごたえのある力作ぞろい

西木正明

前回までは、小説部門と随筆・紀行文を同一の分野とみなして選考したふるさと文学賞だが、今回はこの二部門を異なるジャンルとして分別募集、最終選考に残った作品を読ませていただいた。

これで応募する書き手側は、取材や執筆段階での志が明確になり、選考する側は判断基準をきちんと決めて、候補作を読めるようになった。

結果的にそれぞれのジャンルで候補作のレベルが上がり、読みごたえのある力作に出会うことが出来た。

まずは小説部門の受賞作となった岩井圭吾さんの『たちきる』について。この作品は、なによりもプロットがユニークだった。

剣道の世界で、もっとも厳しい究極の手合わせとされる立ちきり。たったひとりの基立ちと呼ばれる剣士が、交代で挑んでくる三十三人の挑戦者を相手に、およそ三時間にわたって戦い

続ける。

基立ちはどんなに疲れ、竹刀を構えることが出来ない状態になっても、新たな挑戦者と対峙、戦いを全うしなければならない。

幼かった主人公の「俺」に、そうした過酷な戦いぶりをみせた父。物語はその父を中心に、母や兄弟など家族との濃密な記憶を辿りつつ進行するが、その過程での折々の情景描写が見事である。

いわゆる私小説的な作法で物語を綴りながら、そこに剣道の立ちきりをからませた迫力満点の展開が、この作品の持ち味だ。

佳作に選ばれた森川瑠美子さんの『直武、りんどうの恋』の主人公小田野直武は、江戸時代中期に蘭学者の杉田玄白が翻訳した、オランダの医学書『解体新書』で、多くの挿絵を描いたことで知られる絵師である。

直武が江戸詰めになった当時、身の回りの世話をした女性との恋愛が物語の骨格で、妻子ある直武に対する彼女の心の揺れなどは上手に書けている。ただ紙幅の影響、あるいは題名にこだわった結果なのか、男女の関係になって以降のふたりについては、尻切とんぼ状態になってしまった。三十一歳で短い生涯を閉じた直武との関係を含め、あと少しふたりの生き方につい

て知りたいという思いが残った。この部分を書き込んでいたら、受賞を争える作品になっただろう。

随筆・紀行文の部で受賞された、石原敏子さんの『山男と夫の贈物』は、長い年月を共に生きてきた主婦の、さりげなくも温かい、そしてファンタジックな随想である。若かりし頃読みふけった多くの宮沢賢治の作品や、夫が買ってくれたプラスティック製のラジオなどが、夫との思い出と錯綜しつつ、今を生きる自分の力になってくれる。

誰もがこんな老後を迎えたいと思いたくなる、すてきな随想である。

蛇足ながら、八郎潟の干拓は選者の高校生時代に始まった。以後現在に至るまで、大潟村誕生前後の細部については知ることがながった。それがこの随筆で、田圃の割り当てが籤引きで決められたことなど、いろいろと知ることが出来た。生活者サイドの語り部的な物語としても、楽しく向き合える作品である。

佳作となった遠藤美弥子さんの『こまちの旅』は、まさに今という時代を背景にした作品である。両親の介護のために、しげく秋田と千葉の間を行き来する。その足となったのが秋田新幹線「こまち」。

この作品の見せ所は、介護のために往復する「こまち」の車窓風景である。四季折々の車窓風景と、父母との関わりがさまざまにからみあい、読む者の共感を呼び起こす。

父が他界し、認知症が進んで母が「母」でなくなった時の作者の思い。そうした人生の諦観をも乗せて走る「こまち」に、おもわずほろりとさせられる。

〈作家　仙北市（旧西木村）出身〉

特別寄稿

〈世界〉と〈私〉を媒介する対話としての読書

秋田大学教育文化学部　准教授　山　﨑　義　光

大学生に自由なテーマでエッセイを課すと、身の周りから生まれた疑問や驚きや発見を書いてくる。宇宙の不思議。国内外の社会的な出来事。家族や友人との関係。学校やアルバイトのこと。初めて出会った人や体験。日常のなかの驚きや発見。趣味。いまの〈私〉に関わる〈世界〉について、気づくこと、思い考えることが色々あるんだなとわかる。

読書とは、書物を通じて〈私〉を〈世界〉にひらく行為である。〈私〉が、直接間接に、これまでかかわってきた、これからかかわる〈世界〉。読書は、〈私〉の視野を広げ、〈世界〉をより深く広く知ることに通じる。とともに、〈世界〉の方から―異なる視点から、自然や社会の仕組みから―、〈私〉を見つめ直すきっかけとなる。

料理の本を読んで、調理法や栄養について知り、作った料理で家族や友人と交歓する。小説や物語を読んで、虚構の世界を享楽する。旅行先や住んでいる場所の地理・文化・歴史を知る。金融や保険や土地の売買の仕組みを知る。それによって、それまで解らなかった、知らなかっ

た〈世界〉が見えてくる。

仕事をする。家事をする。旅行に行く。運動する。演奏する。歌う。描く。聞く。知る。想像する。楽しむ。それによって、〈私〉は体験的に〈世界〉と関わっている。それは、一方で、〈私〉の視点から〈世界〉を理解し、はたらきかけることである。とともに、自然、社会、また想像として存在する異和的な〈世界〉は、〈私〉をそこへ引きずり込み、制約し、振り回す。だから、〈私〉は〈世界〉をよく知って理解することで調整し、関係を強めたり弱めたり、広げることが必要だ。その媒介となるのが、読書という行為である。「行為」だというのは、食べる、運動する、働く、遊ぶといったことと同じ「行為」だからである。

十九世紀ドイツの哲学者ショーペンハウアーは、よく知られたエッセイ「読書について」で、「読書するとは、自分でものを考えずに、代わりに他人に考えてもらうことだ」と言った。自分が理解できることだけを読むのではなく、「他人」が書いた難解な知識や思考をよく考えて理解することは、読書の大事な過程だ。その努力によって、〈私〉は〈世界〉を広げる。しかし、それでは不十分なのだと言っている。書物と対話すること。知ることに自足するのではなく、それについて考えること。対話としての読書こそが、〈私〉と〈世界〉を媒介する。食べること、運動することが、〈世界〉をよりよく生きることなら、読書もまたそうである。

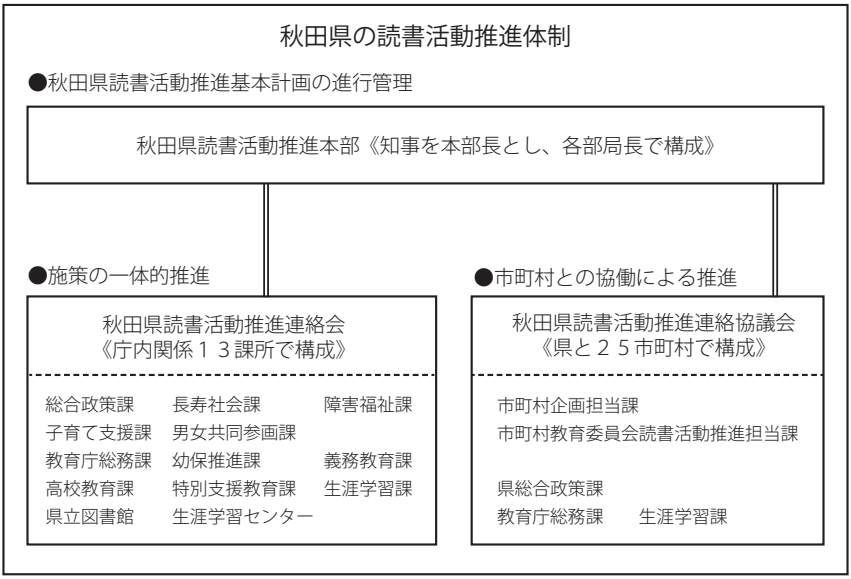
秋田県の読書活動推進施策

～日本一の読書県をめざして～

秋田県は、都道府県で唯一読書条例を制定し、(「秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成２２年４月施行）」)、毎年１１月１日を「県民読書の日」と定めました。

「第２次秋田県読書活動推進基本計画（Ｈ２８～３２年度）」に基づき、「あなたの『読みたい！』をサポートします」、「『読書は楽しい！』の気持ちを広げます」という県民運動の視点で、県民の共感を高めながら読書活動を推進しています。

《読書活動推進体制》



《Ｈ２８年度 県の読書活動推進の取組》

○ふるさとと文学２０１６「石川達三の秋田」（10／29(土)）

※（一社）日本ペンクラブとの共催　於：秋田県児童会館

県内外から約７４０人が参加し、秋田県出身の作家石川達三の人生や作品について理解を深め、文学の世界に浸りました。

第３部の座談会では、石川達三文学の背景や社会的位置付け、秋田県や東北の風土と文学の関わり、自らの読書体験などについて話題が広がり、佐竹知事は、「本を読めば読むほど自分の考えをしっかり持てるようになる」と読書の意義を語りました。

【第３部　座談『石川達三の秋田～読書が人をつくる』】
（左から、吉岡忍氏、佐竹敬久知事、浅田次郎氏、壇蜜氏、西木正明氏）

○秋田県ブックリーダーによる「私の一冊」

地域の読書活動を牽引するリーダー的な存在を「秋田県ブックリーダー」とし、全市町村長から大切な本、思い出の本、何度も読み返している本などを紹介していただき、「私の一冊」としてウェブページ「あきたブックネット」上で発表しました。

○地域読書ボランティア育成事業

県内３地区において、「子育てを楽しくする！絵本ワークショップ」を開催するとともに、県児童会館の協力により、読書ボランティア７団体の朗読にピアノ伴奏と照明等の演出を付けた読み聞かせ絵本ライブを行いました。

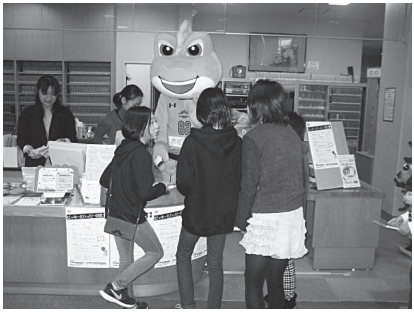
○プロスポーツ等連携読書推進事業

「ブラウブリッツ秋田とエンジョイ読書」（サッカー）

「秋田ノーザンハピネッツとハッピー読書」（バスケットボール）

プロスポーツと連携し、選手やスタッフのおすすめの本を掲載したリーフレットを作成して試合会場や学校訪問で配布したり、キャラクターを使ったイベントを図書館で行ったりしました。

【サッカー試合会場読書ブース】



【図書館で貸出するビッキー】

○スギッチリサイクル文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、保育所等へ贈って再活用してもらう取組です。

平成２３年度の取組スタートからこれまでに、７５０名の方々から御協力があり、家庭で眠っていた１６，０００冊以上の絵本・児童書がよみがえりました。

スギッチリサイクル文庫の設置状況
（Ｈ２３～２８年１２月末現在）

設置施設等	箇所数
保育所・幼稚園	２４３
児童館・児童クラブ	１６２
病院等	１５３
児童福祉・子育て支援施設	４９
企業	３８
その他	３８
計	６８３

～ウェブサイト「あきたブックネット」を知っていますか～

子どもから大人まで、誰でも気軽に読書を楽しむためのお手伝いをします！

あきたブックネット　検索

作品募集要項・応募者内訳一覧

第３回ふるさと秋田文学賞　作品募集要項

●募集作品

○テーマ　秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・人物・風土・物産などを題材とした小説・随筆・紀行文

○部門　「小説の部」　…A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「随筆・紀行文の部」…A4判の400字詰め原稿用紙20枚以内

●応募資格

年齢・性別・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●募集期間

平成28年4月1日(金)から平成28年8月31日(水)まで
郵送の場合は、当日消印有効です。
作品を直接お持ちになる場合は、平日の午前9時から午後5時までとします。
電子メール・FAXでは受付しません。

ご注意
送付部数は
4部(コピー可)
です。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞　…１編（正賞/賞状　副賞/県産品および賞金50万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）…１編（正賞/賞状　副賞/賞金5万円）
「随筆・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞　…１編（正賞/賞状　副賞/県産品および賞金30万円） ふるさと秋田文学賞（佳作）…１編（正賞/賞状　副賞/賞金3万円）

※入賞者には後日、入賞作品を収録した作品集を贈呈します。

●選考委員

１次選考委員　山﨑　義光　氏（秋田大学教育文化学部　准教授）

最終選考委員　内館　牧子　氏（秋田市出身　脚本家）
塩野　米松　氏（仙北市：旧角館町出身　作家）
西木　正明　氏（仙北市：旧西木村出身　作家）　（五十音順）

●応募要領

○原稿
・原稿は縦書き。（ワープロ原稿はA4横判に縦書きとし、必ず400字詰め原稿用紙換算枚数を明記してください。）
・電子データでの応募は不可です。
・日本語で書かれた自作未発表の物で、１人１編に限ります。二重投稿は失格とします。

○表紙
・応募作品には＜表紙＞として、①作品のジャンル、②題名、③原稿枚数、④氏名、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業（学生の場合は学校名）、⑪引用または参考にした文献・資料、⑫募集を知った方法（新聞・雑誌名・ホームページ等）を明記してください。
・＜表紙様式＞は「あきたブックネット」（HP）に掲載しています。
・題名と氏名には必ずふりがなを明記してください。
・ペンネーム使用の場合は、本名（ふりがな）を必ず明記してください。

○あらすじ
・200字程度にまとめたあらすじを表紙の次のページに添付してください。

○応募部数
・４部（原稿は、必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩を紐やクリップで綴じてお送りください。送付原稿はコピー原稿可。）

○個人情報
・応募原稿に記入された個人情報は、本文学賞の選考、結果等の連絡を目的に使用し、あらかじめご本人の同意なく第三者に開示することはありません。

○著作権等
・応募頂いた作品は一切返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。
・入賞作品の著作権はすべて主催者に帰属します。

●選考結果の発表

・最終選考結果は、平成28年10月中旬頃、入賞者に直接通知するとともに、ホームページでも発表します。（選考についての問合せにはお答えできません。）
・表彰式は、平成28年10月29日(土)「ふるさとと文学2016in 秋田」の席上で行う予定です。

●応募・問合せ先

秋田県読書活動推進本部
秋田県企画振興部　総合政策課　県民読書推進班
〒010-0952
秋田県秋田市山王新町14－31（秋田県立図書館内）
電話　018-862-5200　＜平日：午前9時～午後5時＞
ホームページ「あきたブックネット」に詳しく掲載しています。

第３回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧（H28）

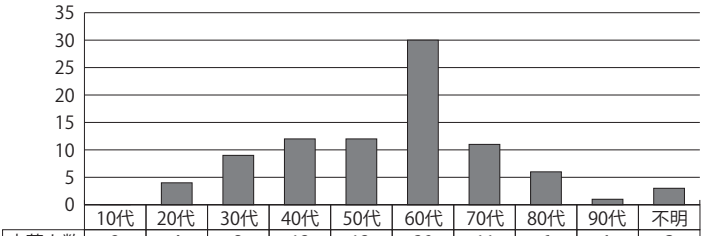
ジャンル別応募数

小説	46
随筆・紀行文	42
計	88

性別応募者数

男	54
女	34
計	88

年代別応募者数



	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
応募人数	0	4	9	12	12	30	11	6	1	3

都道府県別応募数

県内		37
県外		50
1	北海道	2
2	青森県	1
3	岩手県	3
4	山形県	1
5	福島県	1
6	茨城県	2
7	栃木産	1
8	群馬県	1
9	埼玉県	7
10	千葉県	3
11	東京都	8
12	神奈川県	10
13	新潟県	1
14	長野県	1
15	愛知県	1
16	滋賀県	1
17	大阪府	3
18	広島県	1
19	香川県	2
海外		1
アメリカ		1
計		88

募集を知ったきっかけ

	きっかけ	件数
1	チラシ	13
2	公募ガイド	21
3	新聞	3
4	インターネット	14
5	市町村広報等	5
6	ポスター	5
7	前回・前々回応募	23
8	家族・知人	0
9	その他	1
10	不明	3
計		88

- チラシ 13 件内訳（送付 1、図書館 2、コンビニ 1、道の駅 4、公民館窓口 1、不明 4）
- 新聞 3 件内訳（秋田魁新報 2、北鹿新聞 2 ※複数回答あり）
- インターネット 14 件内訳（秋田県ＨＰ※あきたブックネット含む 12、不明 2）
- ポスター 5 件内訳（県立図書館 1、市立図書館 1、アトリオン 1，不明 2）
- その他 1 件内訳（秋田産業サポータークラブ事務局案内）

第3回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日　平成二十九年二月一日

発　行　秋田県

編　集　秋田県企画振興部総合政策課

表紙・四十七頁掲載
「不忍池図」秋田県立近代美術館蔵

秋田県